

笠利町文化財調査報告第29集

辺留グスク発掘調査報告概要

一般県道佐仁万屋赤木名線の改良工事に伴う

2006年3月

笠利町教育委員会

序 文

本書『辺留グスク発掘調査概要』は鹿児島県大島支庁土木課から委託を受けて笠利町教育委員会が平成16年から17年に発掘調査を行い、その調査概要を記録したものです。

辺留グスクは昭和46年に笠利町指定文化財に登録され、文化財の保存と活用がなされてきました。笠利地区はグスクに伴う歴史や伝説が多く残る地区としても知られています。江戸時代には薩摩の奉行所も置かれ、辺留グスクの一角を占めております。奉行所に勤める役人たちに係る逸話もあり、「かさん鶴松」は良く知られています。その他にも伝説や集落の聖地、広場などグスクと共にシマ社会が共存した集落でもあります。

今回の道路拡幅工事で辺留グスクの一部分が工事にかかるため記録保存という形で残す事になりました。辺留グスクは琉球王朝時代とも深いつながりがあるとされています。九州と沖縄の間にある奄美諸島の位置的関係がここでも重要になっているようです。遺跡の記録保存と共に辺留グスクに伴う民俗の記録保存も合わせて行いました。

本報告書はこうした2年間にわたる調査の成果の概要をまとめたものです。正式な報告書はまだ未調査の部分が残っているため全体の発掘調査終了後に刊行する予定です。

最後にこのような専門的な調査には多くの先生方の協力を必要とし、今回もこうした調査に携わった先生方をはじめ現場作業と整理作業を手伝っていただいた地元の皆様方に感謝申し上げます。そして、この報告書が多くの皆様方に活用されたら幸いです。

2006（平成18）年3月7日

笠利町教育委員会
教育長 山野利光

目 次

第Ⅰ章 調査にいたる経過

第1節 調査にいたる経過.....	1
第2節 調査の組織.....	1

第Ⅱ章 辺留グスクの歴史的位置

第1節 奄美大島の位置.....	3
第2節 文献登場する時代背景.....	3
第3節 グスク成立前夜.....	4
第4節 奄美大島のグスク調査から.....	5

第Ⅲ章 発掘調査の成果

第1節 辺留グスクの地形.....	8
第2節 調査の方法.....	10
第3節 層序.....	11
第4節 遺物の出土状況.....	11
第5節 出土遺物	
1、カムイヤキ、白磁、青磁、銅錢、石器.....	15
図版 1～8	
1、北区（1～6）.....	18
2、南区（7、8）.....	24

図目次

第1図 奄美諸島逆位置図.....	5
第2図 12、13世紀交易図.....	7
第3図 辺留城の位置図.....	8
第4図 辺留グスク地形図.....	9
第5図 辺留城調査区域全図.....	10
第6図 土層断面図.....	11
第7図 土層断面図.....	12
第8図 北区溝状遺構図.....	13
第9図 南区遺構図.....	14
第10図 カムイヤキ（南区）.....	15
第11図 カムイヤキ実測図.....	16
第12図 白磁、青磁実測図.....	16
第13図 青磁実測図.....	16
第14図 染付実測図.....	16

第IV章 民俗調査

辺留グスクをめぐる歴史と民俗.....	26
はじめに.....	26
第1節 「笠利」「辺留」を史料に読む.....	27
1 『李朝実録』の「加沙里島」.....	27
2 『おもろさうし』の「辺留笠利」「辺留ぬ子」.....	29
3 琉球の史書と大島諸家譜が記す大島謀叛と「笠理邑」.....	36
4 大島諸家譜にみる「笠利間切首里大屋宇」.....	42
5 『琉球渡海日々記』の「カサン」.....	43
6 嘉永・大島絵図の「辺留村」「笠利村」.....	44
第2節 伝承が語る豪傑と『南島雑話』.....	47
第3節 笠利集落の民俗・歴史地図.....	49
1 笠利間切から村そして町.....	49
2 集落の境界.....	51
3 「笠利村大字笠利総絵図面」を読む.....	53
4 居住空間区分の変遷.....	59
5 歴史的な空間と場所.....	62
6 経験的な空間と場所.....	67
まとめに代えて.....	81

報告書妙録

書 名	辺留グスク発掘調査概報 笠利町文化財調査報告第29集			
副 書 名	一般県道佐仁万屋赤木名線の改良工事に伴う調査			
編 著 者 名	高橋一郎（民俗学） 中山清美（考古学、報告書全般）			
編 集 機 関	笠利町教育委員会			
発行年月日	2006年（平成18年）3月31日			
所収遺跡名	辺留グスク			
コ ー ド	市町村	笠利町	遺跡番号	
遺跡所在地	大島郡笠利町辺留			
調 査 期 間 年 月 日	平成16年9月21日から平成18年3月17日			
調 査 面 積	1,500m ²			
種 別	城址			
主 な 時 代	12c～15c			
主な遺構・ 遺 物	溝状遺構、入り口部分虎口遺構、カムイヤキ、白磁、青磁、染付け、薬莢			

第Ⅰ章 調査にいたる経過

第1節 調査にいたる経過

奄美大島北部に位置する笠利町の東海岸は奄美大島の中でも有数の景勝地として知られている。その一方考古学上は砂丘上に立地する遺跡が密集し、奄美大島を代表する国指定史跡宇宿貝塚をはじめ、長浜金久遺跡群、用見崎遺跡などが立地し、有数の埋蔵文化財包蔵地としても知られている。

砂丘遺跡の密集している東海岸であるがゲスク時代の遺跡調査も行われている。これまで用安湊ゲスク、万屋下山田Ⅲ遺跡、万屋ゲスク、ウーバルゲスクと同じ道路拡幅工事に伴って発掘調査が行われている。

辺留ゲスクは平成15年度に一般県道佐仁万屋赤木名線の改良工事に伴う遺跡の有無についての照会がなされた。こうした開発に伴う事前協議は鹿児島県文化財課も加わって行われる。再三の協議の結果、工事予定地にかかる調査面積2300m²が記録保存調査の必要性が生じた。このことについて調査時期や予算、調査担当者等の協議も行われた。この結果平成16年度に土地取得を終えた900m²の発掘調査を行い、残りは平成17年度に行うことで合意した。

こうした開発前の事前協議はスムーズに行われ、文化財にたいする記録保存の大切さが理解された。発掘調査は平成16年9月21日から平成17年3月15日まで行われた。発掘調査にはいる前には地形や伝承、現状の予備調査が行われている。

平成17年度の発掘調査は平成17年7月4日から平成18年3月17日まで455m²が行われ、残り土地の未買収部分については土地取得後の平成19年度の予定になった。そのため2年間の調査の概要を報告書としてまとめることになった。本報告書は発掘調査が完全に終了した段階で調査の成果を基に考察を行い作成することになる。

第2節 調査の組織

平成16年度

事業主	鹿児島県大島支庁土木課		
調査主体	笠利町教育委員会		
調査責任者	笠利町教育委員会	教育長	中村武秀 (平成16年10月1日まで)
調査責任者	笠利町教育委員会	教育長	山野利光 (平成17年10月1日より)
調査事務担当者	笠利町教育委員会	生涯学習課長	川畑克久
調査担当者	笠利町歴史民俗資料館	館長	中山清美
調査指導	熊本大学文学部	教授	甲元真之
	熊本大学文学部	助教授	杉井 健
	沖縄県埋蔵文化財センター	所長	安里嗣淳

平成17年度

事業主	鹿児島県大島支庁土木課		
調査主体	笠利町教育委員会		
調査責任者	笠利町教育委員会	教育長	山野利光
調査事務担当者	笠利町教育委員会	生涯学習課長	川畠克久
調査担当者	笠利町歴史民俗資料館	館長	中山清美
調査指導	熊本大学文学部	教授	甲元真之
	熊本大学文学部	助教授	杉井 健
調査員	熊本大学文学部	修士課程2年	森幸一郎
		〃	中村友昭

第Ⅱ章 辺留グスクの歴史的位置

第1節 奄美諸島の位置

鹿児島から台湾に至る約1300kmに及ぶ海域は北からトカラ列島、奄美諸島、沖縄諸島、先島諸島と呼称されている。この海域には有人島、無人島の188島から成り、そのうち有人島が68島である。北は種子島、屋久島、九州島へと連なり、九州島の西北には奄美・沖縄諸島の先史時代ともつながりの深い韓半島がある。西には東中国海を隔てた中国沿岸部へとつながる。南には沖縄、八重山、台湾島、バシー海峡を越えフィリピンルソン島へと続いている。これらの島々は南太平洋から北へ発流する黒潮の流により様々な文物と恵を与えている。その黒潮は海上の道として九州島への北上、沖縄諸島、台湾島、フィィリピンルソン島への南下も可能にしている。現在でも奄美の海岸線を歩くと色々な漂着物を目にすることができる。特にペットボトルはフィリピン、台湾、韓国の文字などが確認され、黒潮の主流とその反流によって奄美にたどり着く、こうした漂着物からも海流が南下、北上を可能にしていることを証明している。また地元の漁師たちは古くからこの海流を季節ごとに読み分けて漁を行い、生活の糧として黒潮の恩恵を今でも受けている。

奄美諸島においてこうした地理的条件のもと縄文時代から九州島等と文化の交流があったことを示す遺跡が多く発見されている。南西諸島各地で調査された遺跡からは種子島、屋久島、九州島の特徴、奄美、沖縄諸島の特徴、八重山以南の特徴などがあきらかにされ、国分直一によって奄美の北を北部文化圏、奄美、沖縄を中部文化圏、宮古、八重山以南を南部文化圏と大きく3つの文化圏に区分された^{注1}。

奄美諸島は海に囲まれ融絶した島でなく、東アジア海域に広がり、北部文化圏、南部文化圏や周辺島嶼地域とのつながりを持ちながら交流を行い、遣唐使時代にその航路として北部九州との関係も指摘されている。大宰府から奄美諸島を見る視点は決して偏狭の地としての捉え方ではなく、南への理想郷の入り口、またハブ諸島として重宝がされていたと思われる。古墳時代並行期から古代、中世、特に律令時代は官と民の活動も盛んであり、奄美の地理的条件は沖縄諸島と違う独自の文化を成立させてきた要因を見る可能性がこれまでのグスク調査の成果から垣間見ることができる。

第2節 文献登場する時代背景

「日本列島にはかつて独立した国が二つあった。日本国と琉球国である。」の書き出しで木下尚子が「琉球史のダイナミズム」として考古学ジャーナルに紹介している^{注2}。この中で琉球国は農耕と貿易を経済基盤としたものであり、九州先史時代から一貫して見られる文化伝播の動向であると指摘する。

琉球国が誕生する以前に奄美諸島が大和の律令政権下の影響を受けていたことを示す木簡が大宰府から出土している。木簡は1984年に7世紀中ごろとされる地方行政の拠点で国府、郡家から「掩美嶋」「伊藍嶋」と書かれた2枚が発見されている。木簡が出土した場所は「博多湾を望む大宰府政庁跡、朝鮮式山城とされる大野城跡がある四天王山の裾野の位置にある。・・・二つの木簡は官衛域官衙、役所群の南北の溝に埋まっていた」と当時の出土状況がマスコミにも報道されている。

木簡は奄美大島と沖永良部島を示すものとされ、奄美諸島と大宰府のつながりがより具体的になってきた。さらに文献史学から616年に夜久仁3人が帰化した記録と698年に文忌寸を南島調査に派遣している。さらに735年に高橋連牛養という人物を遣唐使の南島航路調査のためとして派遣している^{注3}。8世紀になりなり大和朝廷が南島を直接支配するために人を派遣し、調査を行わせていることを田村晃一も指摘する。大宰府から木簡が出土しているということは奄美諸島から何が送られていたかということになる。山里純一は文献に「赤木は南島の進むところ」と記録されていることを重視し、南島の交流は奄美以南からオーストラリアまで分布す

る植物「アカギ」ではないかと指摘する^{注4}。さらに南島との交易ということを考慮するならば階層化された社会も考えられないだろうかと鈴木靖民は奄美諸島に階層化された集団の可能性を述べている^{注5}。奄美諸島が続日本紀などの文献に登場する記録を平田信芳は1994年（平成6年）『海の道』歴史の道調査報告書第三集、鹿児島県教育委員会（18～20頁）に次のようにまとめている。遣唐使の航路は、初めの頃は博多湾から出港し、壱岐・対馬を経て朝鮮半島沿いに北上し、山東半島に向かう北路がとられたが、663年の白村江の戦い以後新羅との関係が悪化すると、九州南端から南島路がとられるようになったとしている。

その後平家物語の僧俊寛の島流しの島として登場する鬼界島事例など吾妻鏡、文治元年（1159年）に登場する。承久乱後の1306年に川辺郡が得宗領となったことを示す千竈文書がある。この文書について奄美の重要諸島が領地として与えられているとしている。しかし、奄美諸島が現実的な統治が行われたわけではないとしている。千竈文書については五味克夫も具体的な論をのべている。

第3節 グスク成立前夜

奄美大島、喜界島、徳之島は地理的条件等からダイレクトに九州島との関係を示す鉄、土師器、滑石、掘立て柱遺構等の資料が増えている。笠利町マツノト遺跡、用・見崎遺跡、名瀬市フワガネク遺跡、万屋下山田Ⅲ遺跡、ニヤトグスク、喜界山田半田A、B遺跡（発掘調査現地説明会資料）等から出土しており、今後の資料整理が注目される。

6世紀前後から10世紀前後の奄美諸島は空白の時代とされ、マツノト遺跡出土資料を基に九州と沖縄の関係を示す貴重な資料であるとして「シンポジウムよみがえる古代の奄美」大和文化の強い影響を受けていることなどが指摘されている^{注6}。そして、その後にやって来るカムイヤキと奄美の初期グスクの関係は単なる偶然の同時期ではなく大和社會が古代国家から中世國家成立への大きな変革期に入った時期とも同時期になる。このように大和社會の中世國家成立の影響が奄美、沖縄諸島まで大きな波のうねりのように到達しているように感じられる。それは奄美大島のグスク（赤木名グスク）調査でも少し明らかになって来た。グスクの地形的特徴から九州島との系譜も挙げられる^{注7}。当時の時代背景から交易を中心とした大和社會の商業的交易等を考慮するとグスクは自然地形を利用し、大和との関係を強く受けるが奄美諸島で発生したことも視野に入れなければならない。

これまで調査された奄美グスクの立地的特徴から、奄美大島のグスクを大きく3タイプに分類した。1、海岸に舌状に突き出た台地、2、集落後方の微高地、3、山中にあるグスクなどに大別した^{注8}。これは立地的特徴からの分類であり、その機能や性格的な用途のものからではない。ただ、調査されたグスクは少ないが、これまで調査された出土遺物や遺構から考察すると次のような例があげられる。建物遺構については笠利町万屋グスク、下山田Ⅲ遺跡、宇宿貝塚、用安港遺跡、そして赤木名グスクなどから検出されている。中でも平地及び微高地に位置する宇宿貝塚、下山田Ⅲ遺跡、万屋グスクは建物跡の柱穴及び方形プラン、4本柱が確認されている。出土遺物からもカムイヤキ、滑石、玉縁口縁白磁が主で青磁も出土している。用安湊グスクや赤木名グスクでは土壘、柱穴、添曲輪などの遺構とカムイヤキ、白磁、青磁などが出土している。（2003年～2005年に喜界町において大規模な発掘調査が行われている。その発掘現場に数回足を運び、見学をさせて頂いた。完形の白磁碗、青磁、カムイヤキなどと一緒に無数のピット群が出土しており、グスク時代の掘立て柱の建物遺構が注目される。あわせて、土坑からは炭と共に骨も出土しており、人骨の可能性が高いと言う。）土師器、須恵器の出土もあり、対面する奄美大島北部東海岸のグスク遺跡との関連も注目される。喜界島における今後の発掘調査の成果報告が期待される。

第4節 奄美大島のグスク調査から

奄美のグスク出現についてはようやく本格的な発掘調査が行われた段階であり、まだまだ不明な点が多い。グスクを広域的な視点でとらえ、奄美の位置をもう一度見直してみたい。

奄美・沖縄諸島の文化圏は国分直一によって北部文化圏、中部文化圏、南部文化圏に大別されていることは前述したとおりである。弥生時代に於ける貝文化の交流も含めた文化の北上・南下そして、そのルートなど南シナ海も含めた総合研究の必要性も指摘されている。そして、古墳時代から12、3世紀にかけては奄美、沖縄諸島と中国大陸、朝鮮半島、九州西海岸をとりまく海域が律令社会の中での交易研究も注目される。7世紀代の『日本書紀』『続日本紀』などの古文書による南島や遣唐使の南島路の航路などに関する研究も注目されている^{注4、5}。考古学的には徳之島カムイヤキの発見、奄美諸島のグスクの調査成果などが挙げられよう^{注8、9}。さらに宇検村倉木崎海底遺跡の発見と調査の成果は12、3世紀の南島と中国大陸、朝鮮半島、九州西海岸域の考古学的動向の新たな視点で考察される必要も生じている^{注10}。これまで中国の東海岸から朝鮮半島南岸をとおるのが正規のルートとされてきたが倉木崎海底遺跡の調査成果や宇検村・龍郷町の海底から引き上げられた碇石の発見例や鹿児島県金峰町持株松遺跡の調査などの考古学的調査が増加するにつれ、奄美路は当初からの交易ルートとしての可能性が出てきた。このような交易ルートの拠点となるのは当然何らかの大きな権力及び、勢力が存在していたことになる。奄美の置かれている位置的条件やこれまでの調査の成果などからその大きな力の存在が奄美大島のグスク全体に求められはしないか。

今回の辺留グスクをはじめとするこれまで行われたグスク調査で奄美大島のグスクの特徴が少し明らかになり、新たな問題も提起することになったが従来の南島の位置図を逆さにして考察してみると奄美の位置が大陸の大きな湾の外周部分に位置していることが良く理解できる。台湾から先島、沖縄、奄美、九州西海岸朝鮮半島西海岸の黄海・東シナ海をとり囲むことになる。そして、12、3世紀の沈船や海底遺跡、遺跡、などの発見されている位置は東シナ海湾の内側から発見されている。黒潮がこの湾内を左回りに3月から9月まで北上している。この時期は奄美では「トリバイ」(鳥南風)、「ハイヌカゼ」(南の風)、「ボンバイ」(盆の風)などの季節風が強く吹く時期でもある(本文のシマの地理と四季と主な民俗行事を参照)。また、9月下旬から2月



第1図 奄美諸島逆位置図

までは「ミーニシ」(新北風)、「ニシ」(北風)が吹き荒れる。そのことから黒潮と季節風を利用して泉州・福州から台湾沖縄・奄美と北上することも可能であり、反流に乗って南下することも可能である。金沢陽はこのことを倉木崎海底遺跡報告書「倉木崎沈船考」の中で「出土した陶磁器から1隻の船の積荷であり、陶磁器の生産地からして福建省付近から夏の間に北上した、10月から2月にかけては南下する反流に乗って、台湾から福建省方面に向かったと考えられる。」と記している^{注9}。黒潮を北上・南下は多くの研究者が指摘するところであり、金沢陽は佐久間重男の「明代の琉球と中国との関係」でより実証的に論じていることも紹介している。赤木名グスクの前田川上流には風待ちをする船が待機する「船だまり」と呼ばれている地名も残る。こうした地名もこれを裏付けるものであろう。

今後の問題点として、奄美全体のグスク分布とその特徴。これまでの沖縄グスクとの比較作業。奄美グスクとしての定義。東シナ海域を中心とした中世貿易における奄美のグスクの位置付けなどが必要となり、沖縄とは違ったグスク文化が浮かび上がってくる。

日本の鎌倉時代から南北朝時代、室町時代の中世とも、より具体的な深い関係が考えられるようになり、アジア社会も含めた視点が必要と思われる。

中世城郭では北海道の「チャシ」。本州、四国、九州の「ジョウ」。琉球の「グスク」と3つに分けられる。奄美においては呼称においてジョウとグスクが重複している部分もあり、立地条件、機能的な部分も含めて山城（グスク）と城郭の基本概念も明らかにして奄美グスクの特徴をとらえることも今後必要である。

三木靖は中世城郭の研究視点から「合戦向きの施設を中世城郭と呼び、独立の山・尾根・丘・台地に立地するものは山城と呼ぶ」と分けている。したがって、この時期の蝦夷ではチャシ、琉球とその周辺ではグスク（グシク）と呼ばれる施設があり、その中には必ず中世城郭であるとはいえない。とし、中世城郭としてのチャシ、グスクの調査研究に課題が多いと指摘している。三木の城郭概念からすると奄美大島のほとんどのグスクは石垣を有せず、自然地形をそのまま活かしたものであり、合戦向きの施設ではないように思われる。したがって、中世山城に類することになる。このようなグスクの基本的概念を明らかにして奄美大島のグスクを整理し、その特徴を明らかにすることにより、新たに「奄美諸島のグスク」として捉えることも可能と思われる。

赤木名グスクの調査では最終的なグスクの地形図が作成され、地形から奄美のグスクを考察することが出来る。ただし、初期グスクが12、3世紀であり、どの程度の規模であったかという点は不明である。最終的にグスクの姿は14、5世紀まで機能し、増築されて、今日の地形をなしていると考えるのが当然のことである。

奄美大島のグスクの地形的特徴は北部九州の山城と深いつながりがあり、そして、沖縄に伝播したことでも考える。このことは奄美諸島が大和の律令国家の影響を受け、そしてグスク期には農耕社会が浸透した。

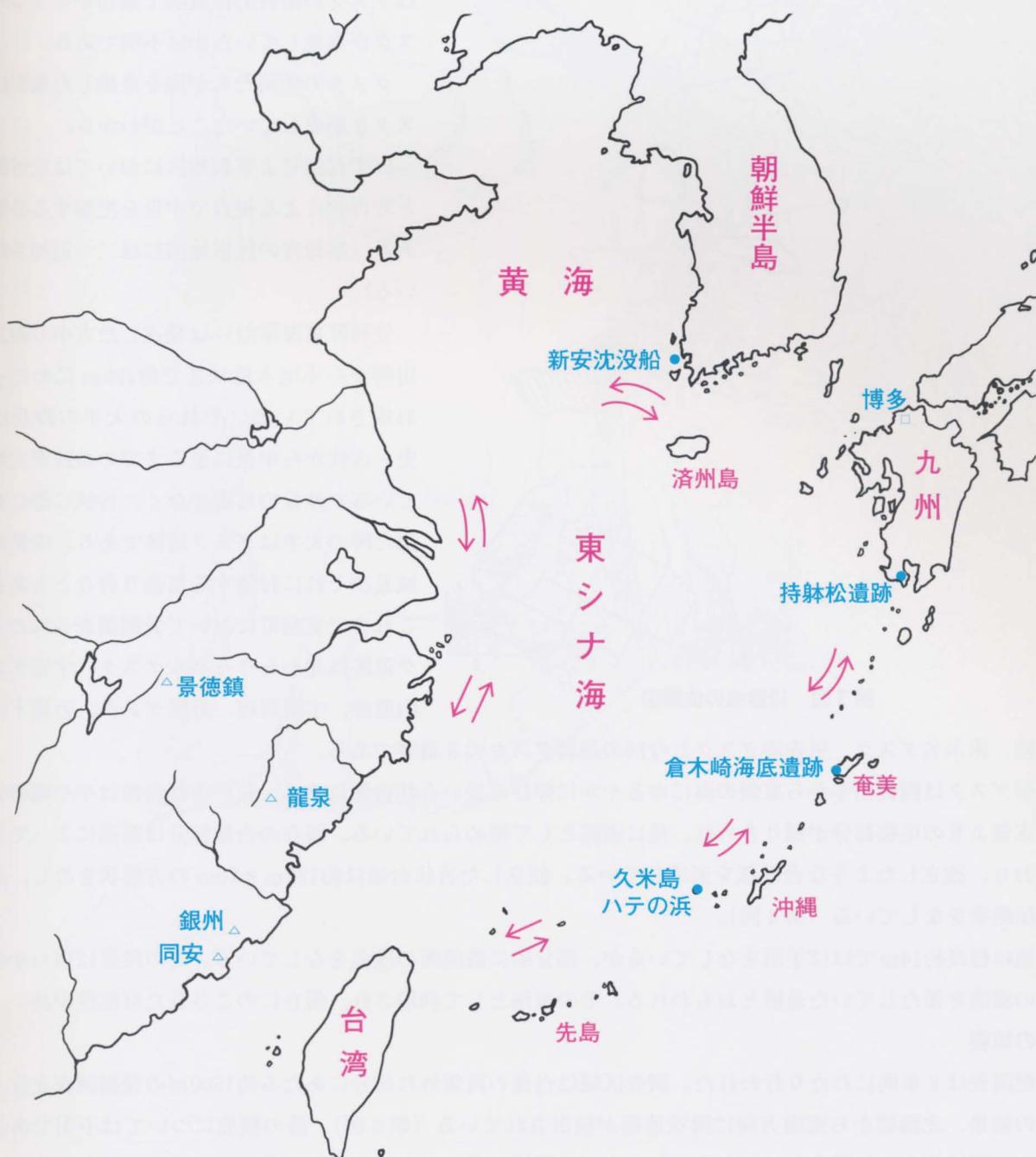
前述したように大和社會の律令社會の中に取り込まれていく奄美諸島と交易を通してその姿が見え隠れする政治的背景の中で奄美諸島のグスクの地形的特徴は北部九州との関わりと奄美諸島独自のグスク発生論という説の可能性もありうるだろう。こうした観点からも辺境グスクの調査成果は新たな資料を追加したことになる。

参考文献

- 注1 国分直一「史前時代の沖縄」『日本の民族・文化』講談社 1959年
- 注2 木下尚子「琉球史のダイナミズム」『考古学ジャーナル』
- 注3 白木原和美「琉球弧と南シナ海」『海から見た日本文化』－海と列島文化10 小学館 1992年
- 注4 山里純一『古代日本と南島の交流』 吉川弘文館 平成11年
- 注5 鈴木靖民・中村明蔵『ハヤト・南島共和国』 春苑堂出版 平成8年
- 注6 シンポジウムよみがえる古代の奄美実行委員会『シンポジウムよみがえる古代の奄美』 1995年 笠

利町教育委員会

- 注7 kiyomi Nakayama 「Castle Sites (Gusuku) on Amami Island」『The Indo-Pacific Prehistory Association』中華民国中央研究院 2002年
- 注8 中山清美「発掘された奄美のグスク」『先史学・考古学論究』Ⅲ 一白木原和美先生古稀記念献呈論文集
- 注9 青崎和憲・伊藤勝徳『カムィヤキ古窯跡群Ⅲ』伊仙町教育委員会—文化財発掘調査報告書(11) — 2001年
- 注10 田村晃一・手塚直樹・金沢陽・中山清美・元田信有・足立拓郎・林克彦『倉木崎海底遺跡発掘調査報告書』宇検村教育委員会 1999年



第2図 12、13世紀交易図

第Ⅲ章 発掘調査の成果

第1節 辺留グスクの地形



第3図 辺留城の位置図

笠利半島東海岸は発達した砂丘、発達したリーフに恵まれ先史・古代にいたる遺跡が密集していることで知られる。グスク分布については笠利町内全体の詳細分布図が出来ていないため不明であるが笠利地区においては大きなグスクが3箇所確認されている。第3図が示すように集落を3つのグスクで囲っている状態である。これはグスクの最終的位置図で最初から3つのグスクが立地していたかは不明である。

グスクの按司たちが海を意識した地形にグスクを形成していたことがわかる。

いずれにせよ笠利地区においては民俗調査と考古学による視点で中世を把握する必要がある（本報告の民俗地図には二つ追加されている）。

笠利町東海岸沿いは発達した大小の砂丘が用岬から赤尾木地峡まで約19kmにわたって形成されている。それらの大半の砂丘は先史・古代から中世に至るまでの遺跡が立地している。砂丘の形成がなく、舌状に海に突き出た岬の大半はグスク遺跡であり、中世の山城及びそれに付随する見張り台などもある。これまで笠利町において発掘調査されたグスク遺跡は北からウーバルグスク、宇宿ダンベ山遺跡、宇宿貝塚、万屋グスク、万屋下山田

III遺跡、赤木名グスク、用安湊グスクと今回の辺留グスクの8遺跡である。

辺留グスクは西側山手から東側の海にゆるやかに伸びる長い舌状台地にある。長い舌状台地はやや幅の狭くなる東側よりの尾根部分が掘りきられ、後に道路として埋められている。現在の台地部分は県道によって切られており、独立したような台地状を形成している。独立した舌状台地は約120m×70mの方形形状をなし、東側は断崖絶壁をなしている（第4図）。

台地は標高約14mではほぼ平坦をなしているが、部分的に数箇所の段差をなしている。この段差は何らかのグスクの機能を果たしていた遺構とおもわれる。その後畑として利用され、現在にのこされた可能性が高い。

調査の概要

発掘調査は2年間にわたり行われた。調査区域は台地の西側外れ部分にあたる約1500m²の発掘調査を行った。調査の結果、北西側から東南方向に溝状遺構が検出されている（第8図）。溝の機能については不明であるがグスクの周縁部分に位置することから防御のための遺構が考えられる。溝状遺構からは石列とともにカムイイヤキや白磁片が出土している。溝状遺構の北側は一段高くなっており、青磁、染付片がまばらに出土しており、

辺留城平面図

S=1:500



第4図 辺留グスク地形図

全体的にパワーショベルと思われる爪跡が全面に広がり、攪乱を受けていることが明らかになった。

辺留グスクの地形は前述したように台地状になっており、西側には段差がみられる。さらに西側周辺部には土壘の残存部分が残っており、台地と段差になっている部分の調査を行った。その結果段差になっている部分はマージ層を削って添郭であることがわかり、土壘と溝状遺構の関係は溝状遺構の上に土壘が作られているのがわかった。

調査の結果、遺構・遺物に時代差があることがわかり、カムイヤキ、白磁を出土する溝状遺構と台地状とは時代差があることがわかった。

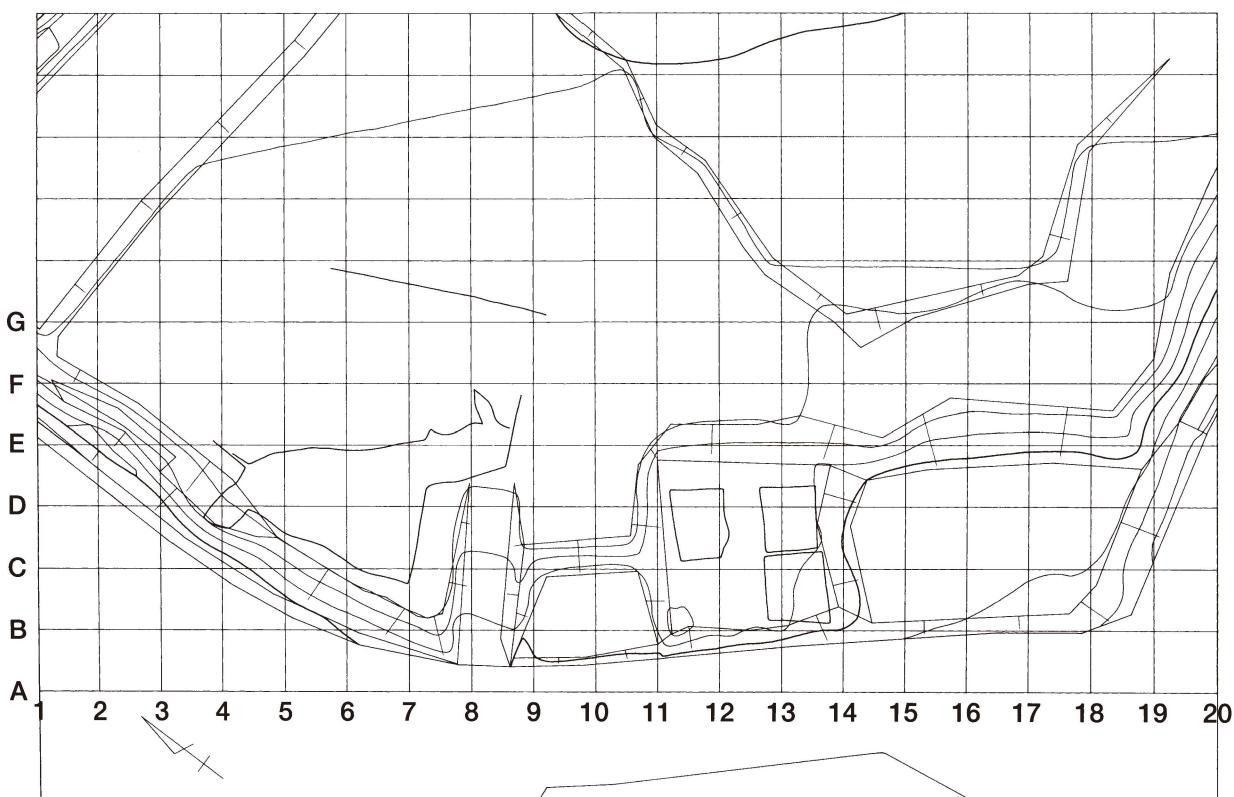
17年度の発掘調査は北区の台地状より一段低い南側部分約500m²の発掘調査をおこなった。南区は北側から緩やかに下り、溝状遺構も北側から続き、西側のカーブしている。南区の南側からマージ層が掘り込まれており底面には拳大の石が敷き詰められた状態で蛇行しながら西側に続いている。ここからは焼土や炭化物が多く出土し、大小の石も出土している。出土遺物はカムイヤキとチャートの剥片が出土しており、北区の溝状遺構の時期に対応している。南側が未調査のため明らかではないが虎口の可能性が考えられ、未調査部分に期待する。

第2節 調査の方法

発掘調査は地形図の作成と確認トレントの調査を同時に始めた。前もって調査区域がわかっており、全面発掘のため遺構、遺物の確認を急いだ。そのため第5図のように全面に5 m × 5 m の方眼を組んで行う調査方法を行った。

グリット番号は西側から東へ A、B、C … とし、北側から南側へ 1、2、3 … とした。

文章で出てくる北区は 1 から 13 までのラインをさし、と南区は 13 から 17 までのラインをさしている。



第5図 辺留城調査区域全図

第3節 層序

辺留ゲスクの層位は地形に合わせて調査区を設定した。第6図1はE-4区のセクション図である。

全体的に北区は14、5世紀の遺構と遺物が主である。南区は12、13世紀のカムイヤキが主になっている。層位の所見については本報告で記述する。

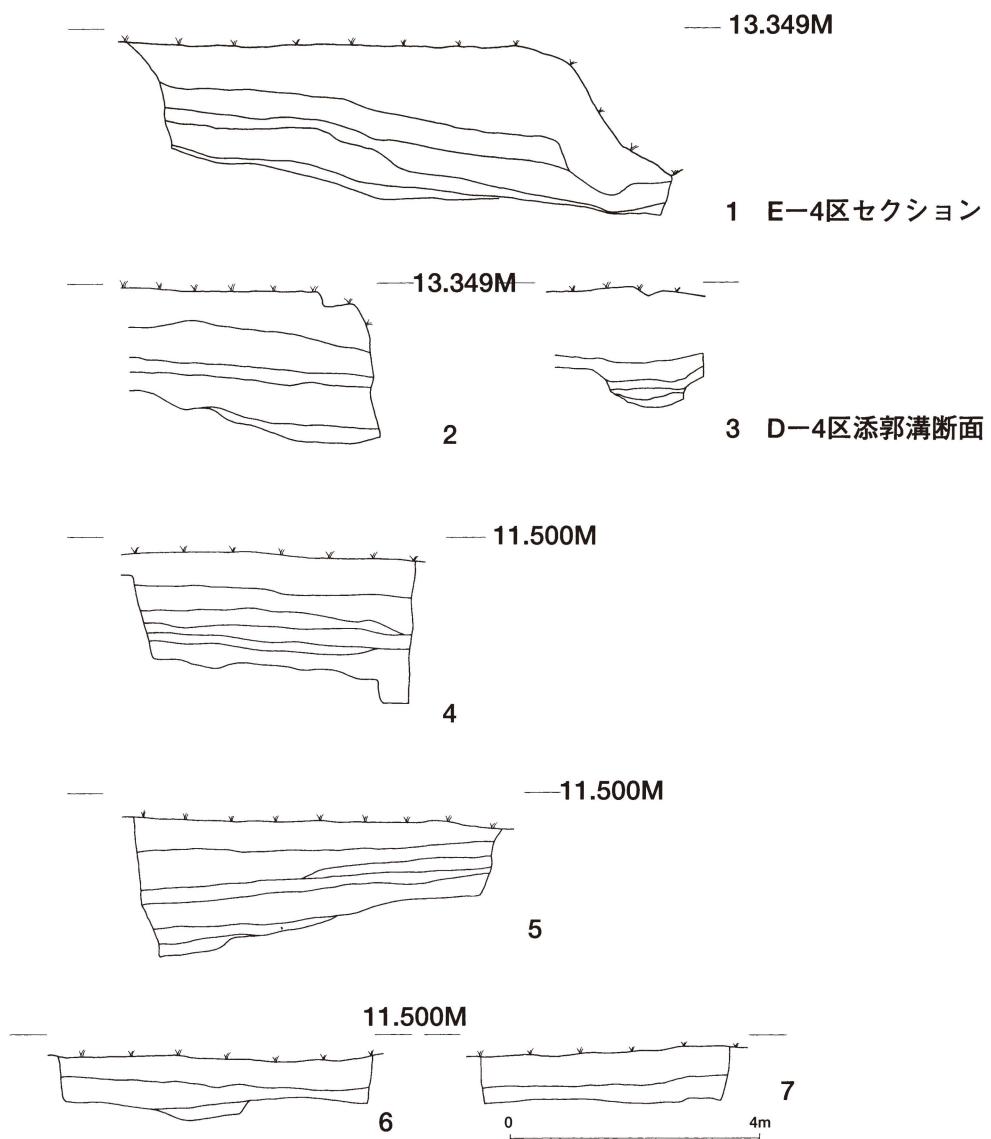
第4節 遺構の出土状況

1、北区（1から13ラインまで）

F2区、G2区はゲスクの端に当たり、大きく落ち込み添郭に続くと思われる。E2が急峻な地形で道路に続き、崩壊の可能性があるためトレンチを入れなかった。添郭に続くと思われる落ち込みからは青磁が出土している。

・添郭

西側1ラインから5ラインまで有段状をなしている。第7図4、5の断面図に切岸をなす部分に側溝をなしている。



第6図 土層断面図

- ・ 土壘

添郭に沿って土壘の後が第7図4の土層断面に確認できる。土壘は5ラインまで確認されているが6ラインから18ラインまでは確認されていない。断面には大まかに土を盛り固めた版築跡が確認される。

- ・ 土構

土構はF3において直径約1.5m、深さ1.2mあり、中には青磁片が検出された。調査区域外に一部分かかる。

- ・ 溝状遺構

溝状遺構は第図が示すようにほぼ直線にD3からD、E7にかけて検出されその延長線上のE11、E、F13、14でも確認されている。溝状遺構は1段の段差を有している。段をなしている部分には人頭大ぐらいの石が並べられており、石は溝の下からも出土している。この遺構の用途は不明である。溝からは白磁やカムイヤキが出土している。

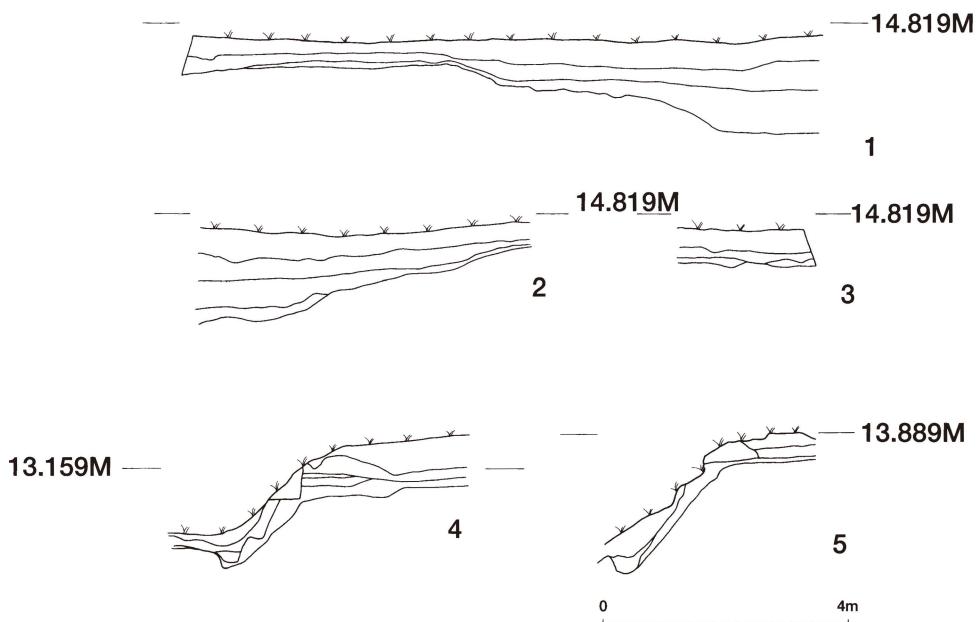
2、南区（14ラインから18ライン）

- ・ 溝状遺構

溝状遺構は北区からの延長であり、出土遺物はカムイヤキだけである。F14区からは焼土と炭化物が多量に出土している。

- ・ 虎口

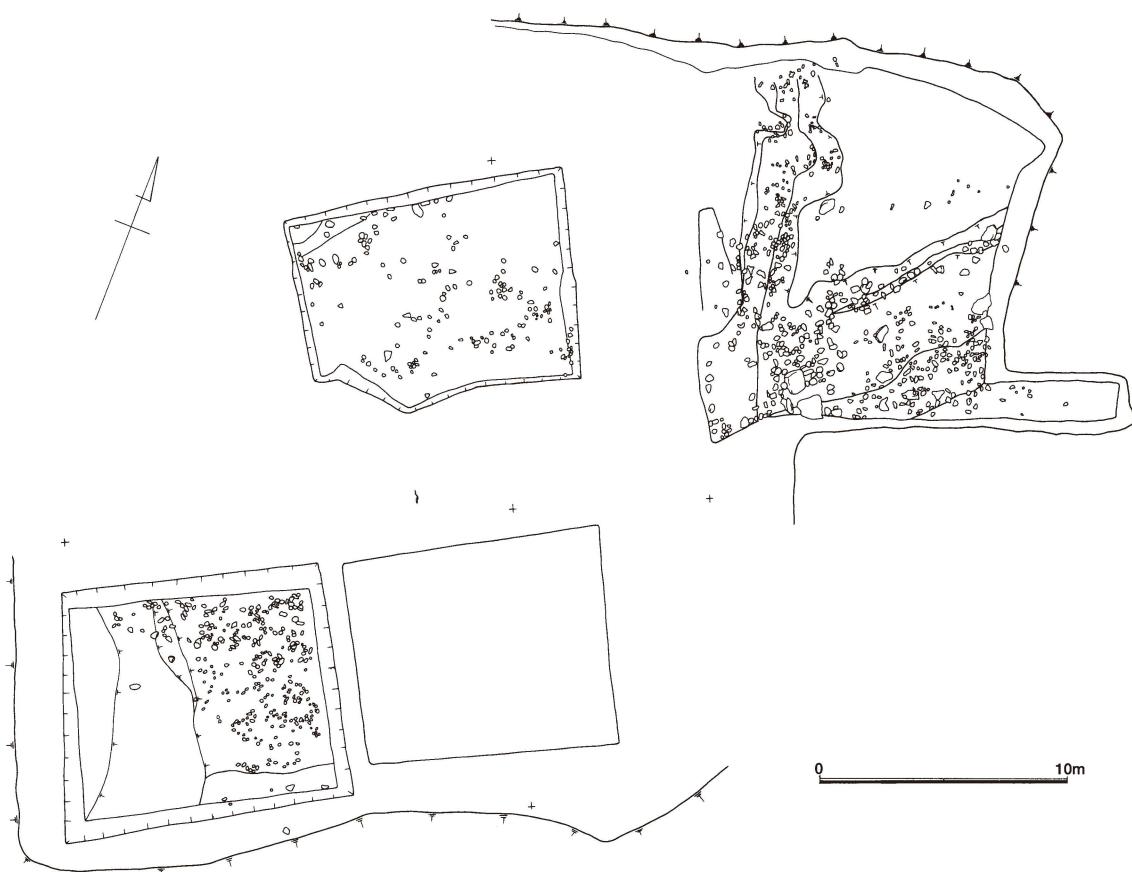
虎口の可能性があるがはっきり虎口であると確認されていない。A17ライン以降の未調査部分の調査に期待される。マージ層が削られ底に石が敷き詰められており、道の可能性がある（第6図土層断面、第9図南区遺構図）。C16区でD16区に蛇行している。次回の調査において報告を行いたい。



第7図 土層断面図



第8図 北区溝状遺構図



第9図 南区遺構図

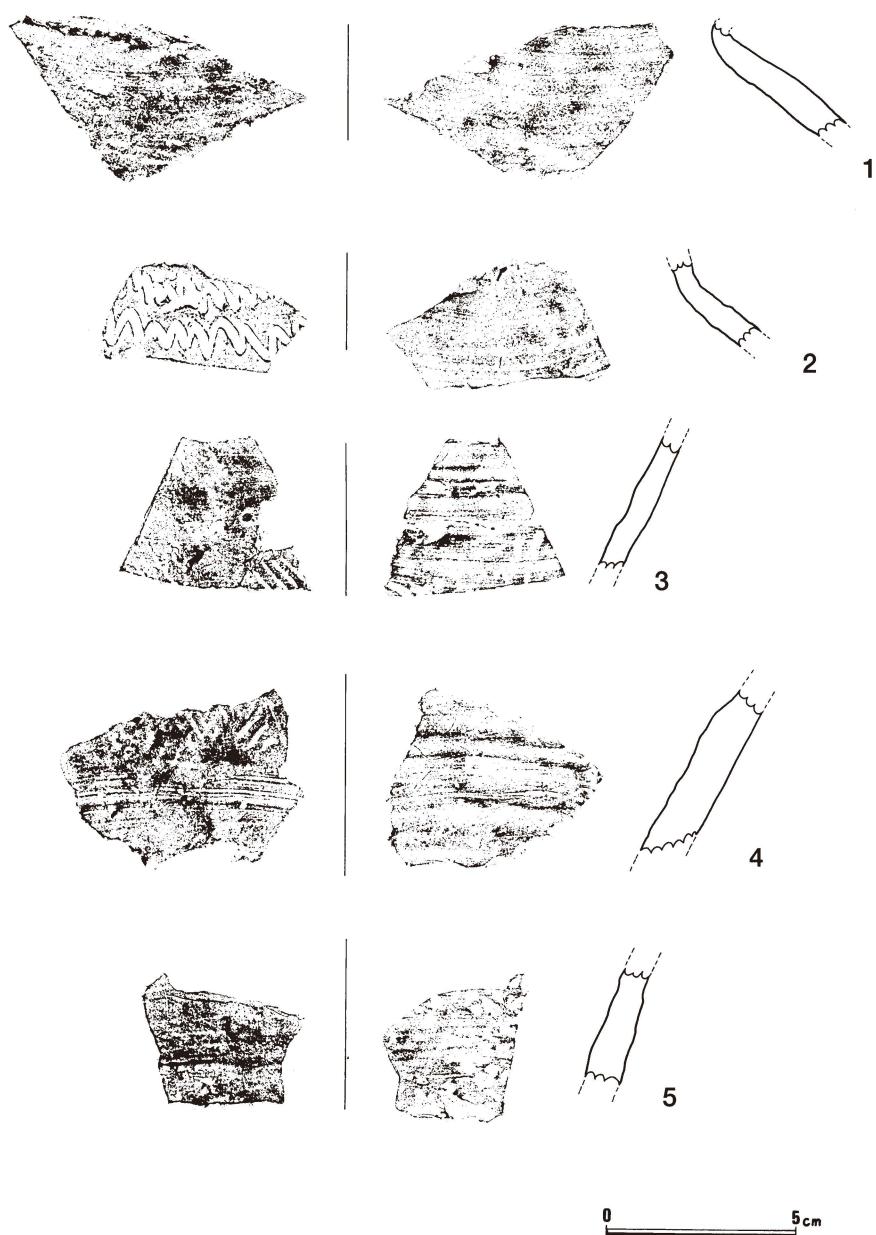
第5節 出土遺物

1、カムイヤキ、白磁、青磁、銅錢、ガラス玉、石器

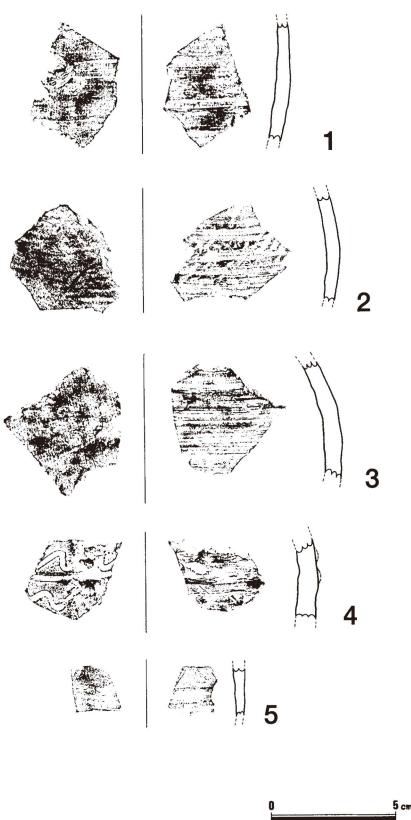
第10、11図はカムイヤキの壺が多い。第10図2は頸部にカムイヤキの特徴である波状沈線をめぐらしている。3、4は外面に叩き目痕が残る。第12図1は白磁の玉縁口縁である。第13図1は連弁の青磁で今回の資料では比較的大きな破片である。第14図は染付けで近世のものも多く含まれていた。銅錢は第図のとおりで1点の出土である。

第図ガラス玉は南区C16区からの出土である。第15図チャートのチップはマージ層からの出土である。そのほか第二次大戦時のものと思われる機銃の薬莢が南区から出土しており、不発弾の可能性もあるとして警察に届け出た。結果的に不発弾ではないことがわかったが警察による現場検証は行われた。

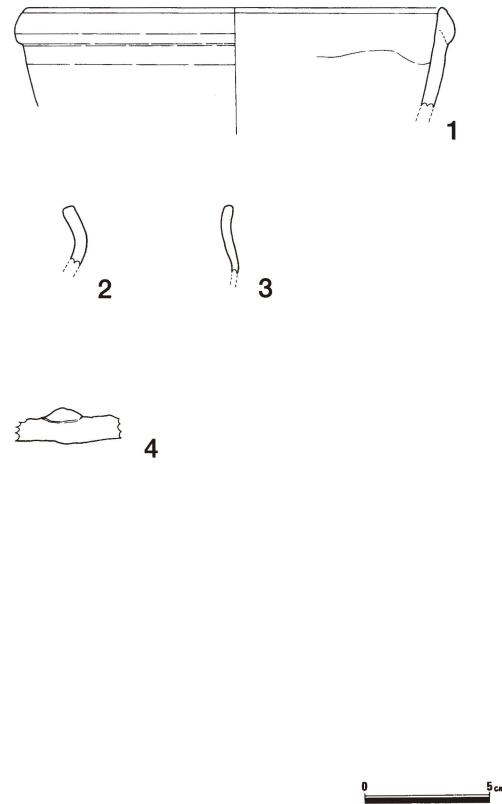
今回の出土器物の量と破片は少なく、小片である。



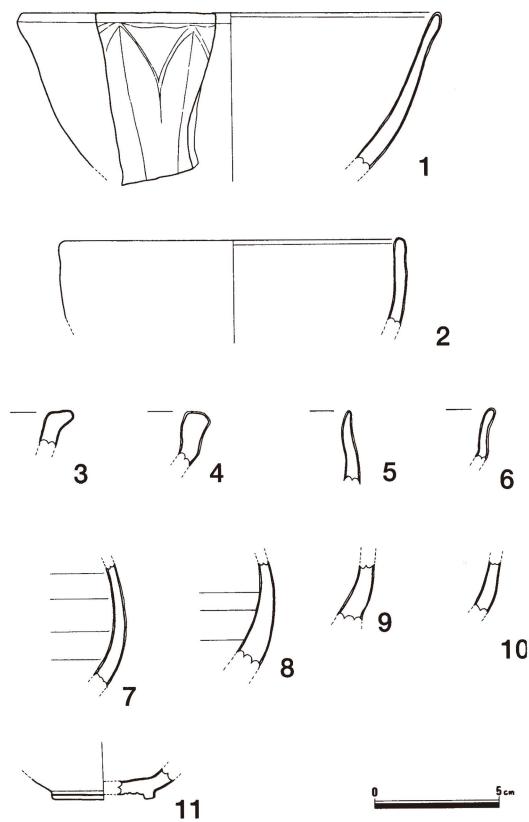
第10図 カムイヤキ（南区）



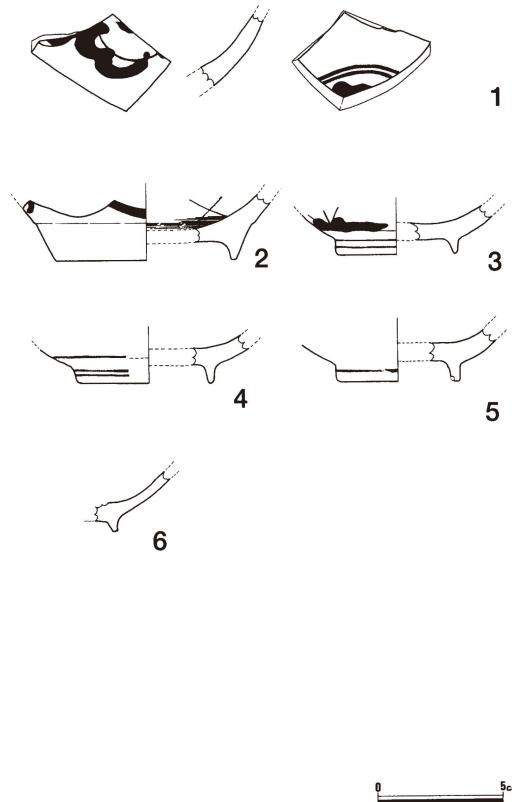
第11図 カムイヤキ実測図



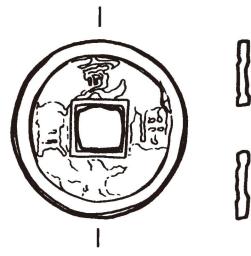
第12図 白磁、青磁実測図



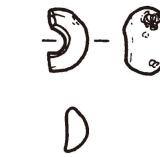
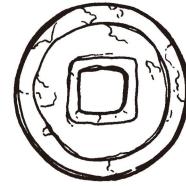
第13図 青磁実測図



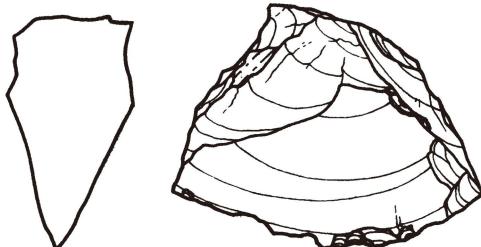
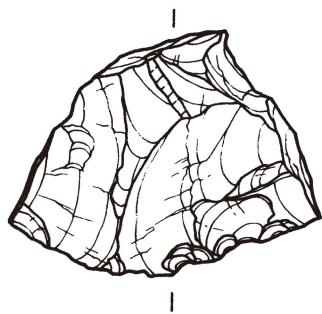
第14図 染付実測図



1 辺留城 寛永通宝



2 ガラス製小玉
辺留城



4 辺留城 チャート

第15図 銅錢、ガラス小玉、チャート 実測図（原寸）

図版1



北区発掘前



北区北側より



北区添郭への落ち込み



添郭土層断面



添郭底遺物出土状況



添郭北側より

図版 3



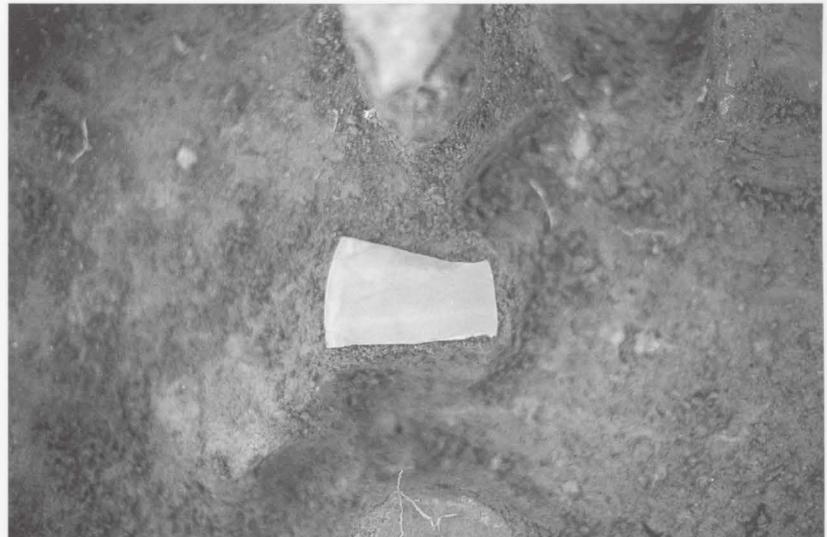
チャートチップ出土状況（北区）



白磁出土状況（北区）



白磁出土状況（北区）



青磁出土状況（北区）



土墨土層断面



添郭

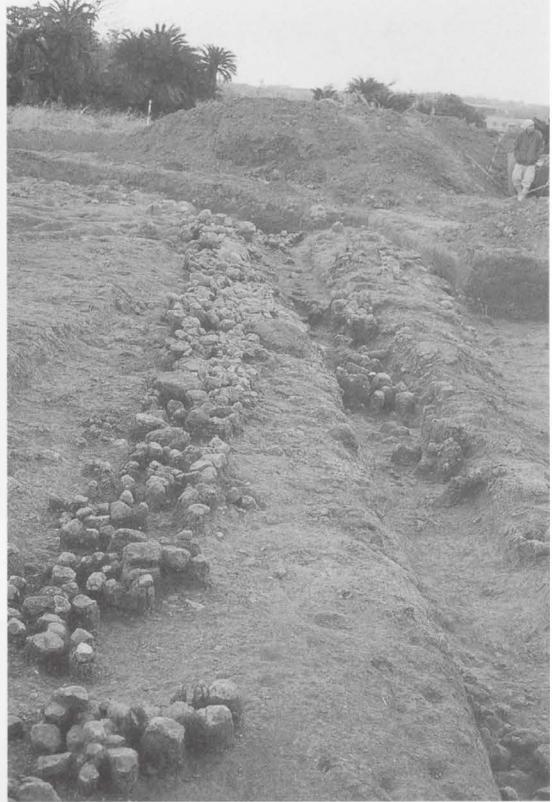
図版 5



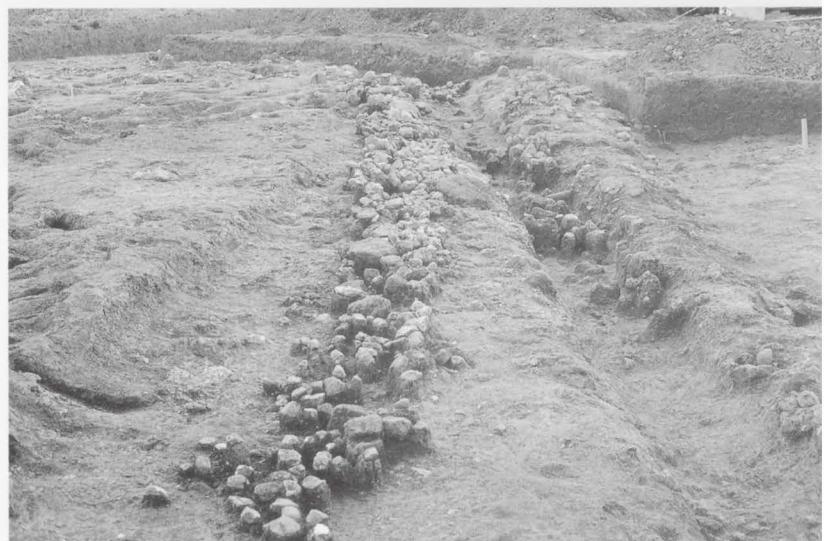
北区南側より



平枚測量

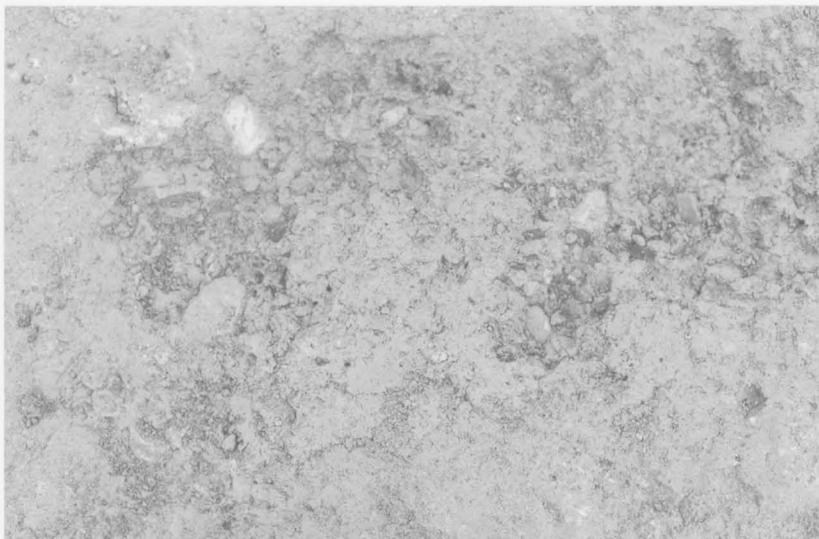


講状遺構出土状況



講状遺構出土状況

図版 7



焼土と炭化物南区



虎口（南区）



発掘スナップ



現地指導（左から新東、田村、手塚、甲元）



測量スナップ

第Ⅳ章 辺留グスクをめぐる歴史と民俗

— 古奄美社会の記録・記憶そして伝承 —

高橋 一郎

はじめに

本章では、辺留グスクを取り囲む地域、とりわけこの場所を生活空間のひとつとする大笠利地区（笠利集落）における空間や場所についての聴き取りを中心に報告することにある。しかし、対象となる土地に暮らす多くの人びとは、先の戦争で出征や徵用を生き延び、戦後社会の変動を出稼ぎや島外生活で生き抜いてきた方々でもある。つまり伝承は、戦争を境にひとつの断層を孕み、猶もその後の地域社会の変容が、伝承する営みそのものを困難にしてきた。更にこうした状況は、地域やそこに暮らす人びとの固有な記憶をも、気付かぬうちに不確かなものにしてしまった。そのため聴き取りは、忘れられつつある伝承や記憶を、多くの不明や曖昧さとともに語られることに耳を澄ますことになった。

そこで、聴き取りによる空白部分に照明するように、従来の読みとともに史料を新たに読み直す試みを取り込むことにした。というのも、ひとつのシマ（集落）である笠利をめぐる多くの歴史記述を見出すことができるからである。その目的は、掘り起こしていく現在とその奥底の過去に向けて、幾重にも横たわるであろう断層を突き抜けて、相互に説明し合うように民俗時間と歴史時間とを交錯させてみることにある。そうすることで、継承と断絶を潜ませる社会的なものと、変貌著しい空間的なものとに包まれた全体の見えにくくなつたありようを、改めて奄美を生きてきた人間とその土地のなかで浮かび上らせて描いてみようということにある。

聴き取りは2004年1月から翌05年3月までの期間を、赤木名地区の調査と並行して行った。地域が広範囲となつたため、聴き取り自体もかなり時間的に制約されたものとならざるをえなかつた。それでも多様な伝承や記憶を描き出すことになつた。しかしここには、それら総てを提示するだけの紙幅はない。そこで辺留グスクという場所を理解していくための道筋を探り、その世界を読み解くことに関わるであろう記録、そして空間や場所にまつわる伝承や記憶を中心によくまとめるにした。

ここではあくまで、史料を新たに読むことと、現在の限られた伝承や記憶を尋ねるなかに、現在から過去へとその奥行きを辿り直していくことになる。それ故、更にその向こう側へと遡及する12～13世紀の遺構をも含む辺留グスクを、遠望するような記述となるのはやむをえない。むしろ、遺跡を擁する空間や場所が、現在のこの位置からどれ程の歴史と往還することを可能とするのか、また埋もれた意味を明らかにするのかを課題として伏在させた報告としてみたい。

本章は以下の構成に従つて展開される。

はじめに

第1節 「笠利」「辺留」を史料に読む

1. 『李朝実録』の「加沙里島」
2. 『おもうさうし』の「辺留笠利」「辺留ぬ子」
3. 琉球の史書と大島諸家譜が記す大島謀叛と「笠理邑」

4. 大島諸家譜にみる「笠利間切首里大屋子」
5. 『琉球渡海日々記』の「カサン」
6. 嘉永大島絵図の「辺留村」「笠利村」

第2節 伝承が語る豪傑と『南島雑話』

第3節 笠利集落の民俗・歴史地図

1. 笠利間切から村そして町
2. 集落の境界
3. 「笠利村大字笠利総絵図面」を読む
4. 居住空間区分の変遷
5. 歴史的な空間と場所
6. 経験的な空間と場所

まとめに代えて

第1節 「笠利」「辺留」を史料に読む

13世紀、琉球の英祖王に徳を慕った大島からの来貢があったとする。琉球の史書は、それを「南宋咸淳二年」(1266年)のこととし、その後「毎年入貢」と記す。だがそれらの史書からは、その後15世紀の尚徳王による「奇界征討」まで、奄美の島々の記録を見出すことはない。

それにとって代わるように、14世紀になると、日本側からの鎌倉幕府御家人となる得宗被官、千竈時家から嫡子らへの相続対象地として、「きかいしま」「大しま」「ゑらふのしま」「とくのしま」が登場する。嘉元4(1306)年の『千竈時家处分状』がそれである。

これらの史料は、当時の東シナ海での日本や琉球の伸縮する版図のありようを理解する手掛りとはなる。そして他方に12世紀前後に始まる徳之島のカムイヤキの生産とその窯跡遺跡。大島宇検村の倉木崎の海底からは、沈船と思しき12世紀後半から13世紀前半の大量の中国陶磁器が引き揚げられた。そして10~11世紀からの長崎県西彼杵半島で製されもたらされた滑石製石鍋が各地から見出される。更に古くは奄美大島でのヤコウガイ大量出土の遺跡など。これら各地からの遺跡や遺物の出土状況が、東シナ海交通と東アジアの交易の歴史を語るものとして注目されている。

しかし、記録のなかに更に個々の島々の様子が記述されていくのは、15世紀半ばまで待たねばならなかった。

1. 『李朝実録』の「加沙里島」

1389年に中山王察度が、倭寇に掠取された被虜人の送還に高麗王へ使節を出したのが、朝鮮と琉球の通好の始まりであった。3年後高麗は滅び李氏朝鮮となるが、両国の関係は続く。この琉球と朝鮮との海路に奄美の島々が位置する。しかしこの航路は同時に倭寇や九州海商が活躍する海でもあった。

1431年尚巴志は朝鮮に使節を出し、以後琉球の使者は九州商人の船に便乗することになって続く。倭寇や九州商人たちの存在が大きな意味を持っていた。こうした時代状況のなかで、朝鮮人漂流者による琉球や奄美の島々の見聞談記が、『李朝実録』に記録されている。

「端宗大王實録」卷第6には、中山王の使者としての博多商人道安によって送還された萬年等の談が記録されている。

去庚午年貴國人四名漂泊于臥蛇島、島在琉球薩摩之間、半屬琉球、半屬薩摩、故二名則薩摩人得之、二名

則琉球国王弟領兵征岐浦島而見之買獻國王⁽¹⁾

まずこのような道安の言によって始まる。そこには「庚午年」即ち1450年の琉球と薩摩の関係が窺える。薩摩との関係は「近年以來不相和睦」とその緊張を語る。琉球の版図が臥蛇島まで北伸したこととも一因だろう。その臥蛇島が薩摩と琉球に「半属」ということは、分有されていたということか。漂流者4名は二分されている。そして2名は、喜界島と解される岐浦島を征する兵を「領て」いた琉球王弟が、これを見て買い国王に献上した、と書き出されている。

その2名の萬年・丁祿の発言は更に興味深いものとなって記録されている。

島人率二人、往水路三日程加沙里島、留十餘日間、琉球國人甘隣伊伯也貴因事到本島、見萬年帶歸于家
— 略 — 留三月間、琉球人完玉之又到加沙里島、用銅錢買丁祿、帶還、——略 — 王命萬年乘駒往其
家、率來用奴一人換、使因與同處 — 略 —⁽²⁾

島人に連れられて「加沙里島」即ち大島の笠利に来る。「往水路三日」とは朝鮮からの行程であろう。そこへ琉球国人の「甘隣伊伯也貴」つまり笠利大屋子が「因事到本島」とある。

まずこの「加沙里島」と笠利が島名となって初出する。またそこは臥蛇島に対してであろうか、「本島」という表現になっている。奄美以北の島々の拠点としての位置を理解したからか。それ故に笠利を島と朝鮮人は受け止めたのか。或いは集落をシマと言うことからの理解かもしれない。しかもそこに琉球国人の笠利大屋子が来島するのである。先の兵を「領た」琉球王弟とは別人と解される。道安の言は2名を王弟が買ったとあるが、これは漂流朝鮮人の処遇をめぐる最後になされたことだろう。萬年の発言は異なっている。笠利大屋子は「白青段子」つまり白と青の絹織物二匹で買い取った萬年だけを琉球へ連れ帰っているのだ。そしてその三ヶ月後、笠利へ来た「完玉之」なる琉球人によって、銅錢で残る丁祿が買い取られている。まずここで島人と琉球人の間で商売として人身の売買が行われたということは、支配関係というより交易関係としての繋がりで琉球と大島が結ばれていることを意味すると想われる。だから国人としての大屋子であっても絹織物との交換で1名だけしか連れ帰れなかったということも理解できる。しかも買われた丁祿の方はそのまま王弟や琉球王に献上されたわけでもない。王命により萬年に馬を乗り継がせて「其家」つまり「完玉之」であろう家へ行かせ、奴1人と丁祿とを交換して萬年と同居させたのである。つまり王弟や国王と雖も、「完玉之」の商行為に見合う対応を取らざるをえなかったということになる。では、この「完玉之」なる人物は一体何者なのか。それについて『おもろさうし』の節で論ずることにする。

このように記録の行間から琉球と大島の関係や交易のありようが、興味深く浮び上ってくる。

もうひとつの記録は「世相惠莊大王實錄」卷第27の世祖8(1462)年の条にある。「初丙子年」1456年正月25日に濟州島を出航した軍船が、2月2日久米島に漂着した。その乗員梁成等の談の記録である。

一、攻戰國、東有二島、一曰池蘇、一曰吾時麻、皆不降附、吾時麻則攻討歸順、令已十五餘年、池蘇則毎年致討、猶不服從⁽³⁾

攻戰国として池蘇・吾時麻の2島があり、吾時麻は帰順して15年余、池蘇は毎年征討するも服従しないと言う。この「吾時麻」が大島、「池蘇」が先の「岐浦島」同様喜界島のことと解釈されている。ということは漂着年から数えて15年前の1441年、或いは記録年から1447年には大島は琉球に従っていたことになる。先の1450年の記録とも見合っている。恐らく大島は尚巴志の治世下に琉球に服したものと想える。しかもその時も、そして1456年の今も喜界島は琉球の征討に抵抗を続けている。その一方で、琉球国境が臥蛇島にあるということは、先の笠利島を「本島」とする記述が意味するように、笠利を拠点とした交易などで繋がる島嶼間関係で大島以北の島々が結ばれていたと考えられる。そうしたなかで、喜界島は倭寇や九州海商たちと連携する海人たちなど、独自の権力に支えられた社会が考えられるのであった。

では、こうした『李朝実録』が記す時代を、琉球の史書ではどのように記述するのか。『中山世譜』には次のようにある。

本年、王親自卒レ軍 征_レ —— 討奇界_レ 先_レ是、奇界島、畔_レ而不_レ朝_レ 連年發_レ兵_レ 屢_レ征_レ無_レ功_レ —— 略_レ ——⁽⁴⁾
明暦成化2（1466）年、尚徳王自らなかなか服属しない喜界島へ、2千余兵を率い、50余艘の船で進攻した。
急令_レ諸軍一齊上_レ岸_レ 放_レ火焼_レ屋_レ 咸声振_レ失_レ 賊兵大驚_レ 魂不_レ附_レ体_レ 降者無数_レ 賊首力窮_レ 被_レ據受_レ誅_レ 王別立_レ酋長_レ 令_レ治_レ百姓_レ⁽⁵⁾

尚徳の軍によって喜界島の「賊首」は誅伐され、別に「酋長」を立てたと記す。『中山世鑑』では誅伐後の帰朝と王の不徳の記述になるが、『球陽』も上記と同様の文言を記す。「別に」という表現からも「賊首」自体も「酋長」だったことが窺える。しかも誅罰後も琉球軍側から選ばれた統治者ではなく、改めて別の在地の酋長を立て百姓を治めると読むことができる。この関係は、先の『李朝実録』に窺われた琉球と大島との交易関係を主体とした繋がりのように、従来考える単なる支配・被支配とは異質な関係が想定されてくる。

確かに尚徳王の喜界島征討は琉球の史書にも記された。だが『李朝実録』は道安の言として1450年の王弟の出兵も記録していた。ではこの王弟とは一体誰のことだろうか。

この1450年に尚思達が没し、王叔となる尚巴志の六子尚金福が王位を継いでいる。先の朝鮮の漂流人萬年たちを、博多商人道安に尚金福の咨文とともに送還させたのが1453年で符合する。すると王弟は尚金福の弟つまり尚巴志の七子とする尚泰久こと、1435年に越来グスクの主となった越来王子ということになる。そして1454年に尚泰久となって王位を継ぐのである。しかし琉球の史書は金福没後の王位継承争いとなる1453年の世子の志魯と王弟布里の乱を記すばかりである。また尚泰久王時代の記述にも喜界島征討など出てこない。ただ『琉球神通記』の「八幡大菩薩事」⁽⁶⁾で、「尚泰久ノ時 諸島ヲ平グ 後ニ兵ヲ遣シテ 鬼界ガ嶋ヲ討ニ 彼レ小嶋タリト云ヘ共堅ク持ツ」と、尚泰久の喜界島出兵を記す。しかしその後文に八幡社祠建立を記すため尚徳の誤記とされるが、八幡社の混入併記とも考えられる。少なからず尚泰久による喜界島出兵が正式に記録されないのは、この征討が成功しなかった故なのか。『李朝実録』は琉球史書の記述の背後を照明するように尚泰久を浮かび上らせるのであった。

だが、この王弟についてはひとつの読みが提示されている。後述する『おもろさうし』に謡われる「勝連が船遣れ」の下句「ましふりが 船遣れ」の「ましふり」が、金福王の子志魯と王位を争った金福の弟布里を謡ったものとする推定である。「勝連水軍の統率者として、大島・喜界を討った実績が、彼の自負となり兄金福王の子と王位を争い、共倒れになる」ものだろうとしている。つまり喜界島征討の王弟とは、1453年に王位争いで滅ぶことになる布里であろうとする考察である。⁽⁷⁾ この王弟については向後の課題としなければならない。

このように『李朝実録』に載る奄美北域の大島とりわけ喜界島は、琉球を統一した尚巴志が1439年に没し、尚泰久が1454年に王位を継ぐまでの四代15年間を越えて、琉球王府に順わぬ「攻戦国」として記録されていた。ところが、琉球の史書がそのことを記述しないのは、どのような意味があるのだろうか。

2. 『おもろさうし』の「辺留笠利」・「辺留ぬ子」

琉球の史書が記述しない部分を、12~17世紀のウミイ・オモロなど島やシマの古歌謡を採録した『おもろさうし』は、どのように記録したであろうか。ここでも、まず「笠利」や「辺留」を謡うオモロを糸口に辿り直してみる。

奄美の島々を謡うオモロは、卷十三の「船ゑとのおもろ」に収録されている。30首余を数えるそれらのオモロは、奄美の島々で謡われたものというより、沖縄の航海者たちによって航行地として謡われたものと考えら

れている。

まず、神女「押笠」が喜界島から那覇港に到着するまでの海路を謡ったものがある。

一聞ゑ押笠
とよかむ押笠
やうら 押ちへ 使い
又喜界の浮島
喜界の盛い島
又浮島にかゝら
辺留笠利きやち
ひる 又辺留笠利から
中瀬戸内きやち
又中瀬戸内から
金の島かち
又金の島から
せりよさにかち
又せりゆさにから
かゑふたにかち
又かゑふたにから
あすもり 安須杜にかち
又安須杜にから
かなひやぶ 金比屋武にかち
又金比屋武にから
那覇泊かち ⁽⁸⁾

奄美では喜界島を起点に大島を南下して島々を、そして沖縄に到っては拝所を謡うなかにあって、とりわけ個別の地名ともなって「辺留笠利」と謡われることに目が止まる。『李朝実録』が「加沙里島」と記したように、「笠利」を島として、或いはひとつのまとまりある地域として辺留と笠利とを捉えていたからだろうか。ここにまず他とは違う表記が施されていた。

また、このオモロは巻十「ありきゑとのおもろ」にも類歌が収められている。「ありきゑと」とは漕行のことで、「船ゑと」が帆走と指摘される。その漕行故に寄港地が多いのか。沖縄に入ってからの寄港地が異なつて謡われる。国頭村辺土名の御嶽「安須杜」を出航するとこのようになる。

—— 略 ——

又安須杜にから
あかまるにかち
又あかまるにから
さち 崎ぎや杜かち
又崎ぎや杜から
金比屋武にかち
又金比屋武から
さきよだ 崎枝にかち

又崎枝から
親泊にかち
又親泊から
首里杜にかち⁽⁹⁾

国頭の辺戸そして辺土名を出た船は古宇利島から今帰仁城の拝所金比屋武を経て、「岐枝」即ち半島となって海へ突き出す中頭郡読谷村の残波岬、そして親泊の港に着き首里城へと上っている。ここではその「岐枝」を謡うか謡わないかという差異があることに注目しておく。

またこのオモロでは那覇の美弥辞と解される「親泊」とあるが、先のオモロでの「那覇泊」と表記が異なっている。ここには古く英祖王代泊御殿に諸島貢物を貯える公倉があったという泊港（あめく口）と、1451年那覇と首里の間に長虹橋を築いて新たな拠点港となった那覇との違いも考えられないか。こうした差異に注意すると、喜界島を出て那覇への海の道を謡うオモロ二首には微妙な時代差も窺える。

こうして奄美と那覇の港を結ぶ海路が示されて後、更に三十首程のオモロが配されて、今度は奄美の島を南から北上していくようなオモロの配列になる。だがそれらからは外れるように遅早く北辺に位置するはずの「辺留」が登場することになる。

一辺留ぬ子が やせの子が
ふな 船もどろ 押し浮けて
い 出ぢやさ数
せぢ添わて 走りやせ
さあく あら 又細工 選で
は ちへ 接ぎ手 選で
速もどろ 押し浮けて
出ぢやさ数⁽¹⁰⁾

意味は、辺留の領主であるお方がきらめく美しい船を出航させるたびに、靈力で守護して走らせよ。船の細工師たちを選んで、速くて美しい船を浮べて出航させるたびに。つまり辺留の領主が出す船への海上守護が謡われているということになる。そして並んでもう一首が次のようにある。

一辺留ぬ子が 船遣れ
おや おうね 親御船は 押し浮けて
浮ける数
せぢ 添わて 走りやせ
い ちへき 又意地氣あさが 船遣れ⁽¹¹⁾

このオモロの意味も、辺留の領主が乗る船の航行ごとに靈力で守護して走らせよという内容である。

この二首のオモロで注目したいのは、辺留の領主と解すことができる「辺留ぬ子」にある。ひとつは未詳語である「やせの子」が同義で解される。そしてひとつは「意地氣あさ」（すぐれた父人）である。「あさ」とは父や親の同義語で、集落の長者や尊敬される男の呼称で、族長的性格を持つ存在を言う。後に政治的支配者となる按司のこともいうと解釈される。ということは、辺留にはそれなりの地域を統括する支配者の存在が考えられるということになる。

巻十三のなかで、奄美の島々を謡うオモロが比較的まとめられて配されているなかにあって、この「辺留ぬ子」のオモロは、奄美の他の島々のオモロとは異なる位置にあった。そのことがまた別の意味を表徴しているとも言えそうだ。実はこの「辺留ぬ子」と謡われるオモロは、他の巻からも見出すことができる所以である。そ

のひとつが、14世紀の中頃の英雄的人物や出来事を謡ったものが多くまとめられるという卷十四の「ゑさおもろ」のなかの一首となってある。

一辺留のやしの子
命ふつくるに
照る真物 照り居ら
又喜納大庭に
喜納 門 口に ⁽¹²⁾

辺留のやしの子は立派な「ふつくる」（未詳、場所名か）に、靈力ある神女が照っていらっしゃるとあり、喜納の神祭の庭にと謡っている。先の「辺留ぬ子 やせの子」が、ここで「辺留のやしの子」とほぼ同様の呼称で登場し、神女の靈力に守護される様子を称えている内容となる。この未詳語とある「命ふつくる」も、笠利地区にある親の懷に抱かれたように安らかな所と伝承されて残る「ウヤツコロ」という場所名と同義で理解できるだろう。しかし、その場所は「喜納大庭」と、沖縄の読谷村字喜納の神祭の庭となっている。では、この大島の辺留と沖縄は読谷村喜納との繋がりをどのように理解すべきなのだろうか。

先の卷十三の辺留を謡うオモロ二首の前には、次のように謡われるオモロが配されていた。

一大にしに 鳴響む
聞へなよくら
吾 守て
此の渡 渡しよわれ
又崎枝に 鳴響む ⁽¹³⁾

読谷村の古名となる「大にし」そしてその異称となる「崎枝」と謡われ、神女なよくらにこの残波岬を通過する航海守護を祈願している。そして前掲の「辺留ぬ子」を謡う二首が描かれていたのである。どうも笠利の辺留とこの崎枝／残波岬を経る海路との結び付きが考えられてこないだろうか。確かに、那覇港出入の船舶で北航するものは残波岬の沖で船首を転ずるとされる位置にある。

戦後になって読谷に改称された読谷山を含む「うらおそい きたたん よんたむざおもろ」が卷十五としてある。地方オモロとして、尚真王時代の按司首里集居の時に収録されたと考えられる同卷にも、「辺留」を謡う二首を見出すことができる。

一辺留のやせの子
命ふつくるに
親拍子 ^{あま} 歓へて 使い
又今日の良かる日に
今日のきやかる日に ⁽¹⁴⁾

一辺留のやせの子
命ふつくるに
見ちへ居て 息 ^せ 為らに
又今日の良かる日に
今日のきやかる日に ⁽¹⁵⁾

意味は、「辺留のやせの子」を神祭をする吉日に、神謡を謡い行う神遊びに招待しましょう。そしてもうひとつは、神遊びを見て居て欲しいと謡う。更にはこの二首の後には、先の卷十四で謡われた「喜納大庭に」の

文言で謡い出されるオモロが配されている。

一喜納大庭に
喜納広庭に
てだ清ら 使い
又今日の良かる日に
又今日の生やかる日に⁽¹⁶⁾

喜納の神祭の広場に、「てだ清ら」と敬う支配者を招く意味である。「辺留のやせの子」の二首との一連のオモロとして理解できる。

このように巻十五では「辺留のやせの子」を、喜納の神祭の場に招待する内容のオモロ群としてある。これらと同列に神女に守られる巻十四の「辺留のやしの子」も捉えることができる。では、巻十三で辺留の領主と解した「辺留ぬ子が やせの子が」のオモロや、「辺留ぬ子」「意地氣あさ」と謡うオモロと、これら巻十四・十五のオモロとの関連をどのように考えたら良いのだろうか。

巻十三の「辺留ぬ子」は、船の航行とその守護を謡っている。そして巻十四・十五の「辺留のやせの子」は、神女の靈力に守られる神祭を謡う。ということは、「崎枝」を出自とする者が辺留の統治者となって派遣され、時々の神祭には帰って来て、共に神の力を授かりましょうということなのだろうか。

先の喜界島からの航路を謡った「船ゑと」と「ありきゑと」とのオモロ表現の差異として、「崎枝」や「大にし」と謡われる読谷山を謡うかどうかに注目しておいた。この違いも、同地を出自とした奄美北域とつながる人物の趨勢を反映したものと読んでみることになる。また「辺留笠利」と単に「辺留」という表記は、赴任地と役名による呼称との違いがあるのかもしれない。

ここで沖縄島の読谷山の歴史に注目してみよう。読谷村でひときわ目を惹く存在のが、座喜味グスクである。読谷山グスクとも言われるグスクが築かれたのは15世紀前半頃とされる。築城主は護佐丸である。

護佐丸の父祖以来の居城である山田グスクから、この座喜味へと移ってくる。その年は1410~11年頃に北山の今帰仁城主攀安知への構えとも、⁽¹⁷⁾北山を滅ぼした尚巴志が王位を継いだ1422年とも⁽¹⁸⁾される。この護佐丸が1416年の尚巴志による北山討滅のための今帰仁城攻略に、読谷山按司として参戦しているから、既に1410年代から築城が始まっていたと考えられる。

『毛氏先祖由来伝』にはその築城について次の記述がある。

「此城者國中並鬼界大島抔寄夫にて作立、近年迄何嶋之積石と石垣段端に銘名為レ有レ之由候」⁽¹⁹⁾

また『毛氏先祖由来記』にも、鬼界（喜界）や大島などから人夫たちが集まって、山田城の積石を持ってきて競って積んだとある。⁽²⁰⁾

このように座喜味グスクの築城に、喜界や大島の者たちが徴用されていた。つまり尚巴志或いはそれに代わる護佐丸と奄美北域の二島である喜界・大島との支配・被支配の関係が考えられることになる。

そして1439年尚巴志が没して尚忠になって翌40年、護佐丸は座喜味から中城へ移封されたという。『毛氏先祖由来伝』では、勝連半島に地盤を確立しつつあった勝連按司阿摩和利からの中山防御として、尚泰久の命で1458年に中城按司になったとされる。⁽²¹⁾ 中城移封の年代も座喜味の時と同様、築城開始と完成という時間の幅のなかにありそうだ。少なからず、中山と勝連の間に位置することで、護佐丸と勝連按司との緊張は高まることがある。

護佐丸と阿摩和利の関係は、中山王との結び付きとともにある。家譜や伝承は語る。尚泰久の娘（一説に護佐丸の娘が尚巴志に嫁し、その娘）モモトフミアガリ（百度踏揚）が阿摩和利の夫人となっている。そうしたなかでの両者の対峙であった。阿摩和利による尚泰久王への護佐丸謀反の讒言がなされる。護佐丸が尚泰久の

軍勢を前に自死したのとされるのが1458年である。更にモモトフミアガリからの夫である阿摩和利による首里城攻略の知らせに、尚泰久の軍勢が迎え討ったとされる。これが、護佐丸・阿摩和利の乱と言われる。

しかしこの動乱の歴史的位置付けが十分になされてきたとは言い難い。組踊『二童敵討』や家譜などによつて、忠臣護佐丸と逆臣阿摩和利という文脈が歴史を支えてきたことも一因する。そうしたなかで田島利三郎を嚆矢とする伊波普猷や仲原善忠らによる論考⁽²²⁾が重ねられてもきた。ここでは視座を奄美の側に措くことで、改めてこの動乱を受け止めてみよう。

『おもろさうし』に謡われた「辺留ぬ子」のオモロ群は、読谷山に出自するであろう人物が辺留の統治者となつてあったことを窺わせた。そしてその読谷山には、1410年代から護佐丸が座喜味グスクの築城を始めて、山田グスクから移つて來た。しかもその築城には、大島や喜界からも寄夫が徵用されている。こうして護佐丸が読谷山按司として活躍するのは、北山攻略をしてほぼ三山を統一した尚巴志の治政下と重なる。そして尚巴志が没した翌1440年に、護佐丸は中城へ移封となる。それに合わせるかのように、『李朝実録』では1440年前後に大島が琉球に従わざ征討され、1450年になっても未だ喜界島は抵抗を続いていたことを記す。他方で琉球の版図は拡大を続けており、トカラ列島の臥蛇島を薩摩との国境としている。だが国境も琉球と薩摩間での分有による了解に過ぎず、琉球領内である筈の喜界島の叛意はそうした国境を自在に往来する海人たちの存在を抱えていたことを窺わせる。むしろ笠利を「加沙里島」と捉え、臥蛇島にとっての「本島」と認識した朝鮮人の理解は、笠利を拠点のひとつとする東シナ海交通網が臥蛇島まで及んでいたことの反映とも考えられる。少なからず辺留ひいては奄美北域との関係を結ぶ読谷山を護佐丸が領したことは、築城への寄夫の徵用に見るよう、従来の交易関係を越えた関係が成立していたことだろう。その護佐丸の中城移封を契機とするかのように、大島・喜界島の叛意が露出してきたようにみえてくる。

また尚巴志が没し、尚忠・尚思達とそれぞれの在位が5年という短さも、大島・喜界島などの叛意の一因かもしれない。1450年の尚金福の時、『李朝実録』での道安の言に依れば、喜界島征討に琉球王弟が兵を出していた。王弟となるのは越来王子、後の尚泰久と考えられた。また朝鮮人萬年によれば「甘隣伊伯也貴」つまり笠利大屋子が、また3ヶ月後「完玉之」が笠利へ來ていた。この「完玉之」も朝鮮音で「ワン・オクチ」つまり「湾掟」のことだろうと指摘⁽²³⁾される。この湾も読谷山大湾のことで、後代薩摩侵攻の上陸地ともなった。少なからず、護佐丸の中城移封と前後した大島の叛意は抑え込まれ、引き続き読谷山と笠利との交通が保持されていた。この事は湾掟によって笠利に残された朝鮮人丁禄を銅錢で買い取るという商行為からも窺えるのであつた

読谷山の残波岬は、那覇を出て北航する船が船主を転ずる重要な航路のアテ（目印）であった。その位置がオモロに「崎枝」「大にし」と謡われた背景もある。『おもろさうし』卷十五には、読谷山の「泰期思い」という人物を謡う一連のオモロがある。そのひとつを挙げてみる。

一字座の泰期思いや
唐商い 流ゑ行らちへ
按司に 思われ、
又意地氣泰期思いや ⁽²⁴⁾

ここに謡われた「泰期」とは、14世紀の中山王察度の弟である。1372年に察度の命により明を訪れ、7年後にも入貢している。⁽²⁵⁾「唐商い」が謡われる背景である。また察度は1389年には玉之／掟を朝鮮に派遣し、倭寇に掠奪された朝鮮人を送還して、高麗との通交を始めてゐる。こうした海外との交易の拠点のひとつに読谷山の字座がその位置を占めていた。また長浜も南蛮貿易で栄えた地ともいい、⁽²⁶⁾ 南蛮貿易の始まりは読谷山とも言われている。更にオモロに「喜納大庭」と謡われた喜納には喜納焼の窯跡がある。⁽²⁷⁾ 南蛮焼もここから

始まったとされる。また壺屋七門中の四門中が読谷山系で、今も読谷に神拝みにいく。護佐丸先祖の山田按司の配下に南蛮焼に似た山田焼があり、護佐丸の移居とともに技術者も移ったとされる。これも交易の主要なひとつとなったであろう。

このように辿ると、尚巴志の命で座喜味へ移った護佐丸の任のひとつは、読谷山を拠点とする交易活動の掌握が考えられてくる。そうした目的のなかでの、座喜味グスク築城に際した大島・喜界島の寄夫の徵用ではなかったか。時代は下るが、『琉球国由来記』（1713年）の卷二「諸間切諸島夫地頭詮理ヲエカ人之事」の「讀谷山間切」には「比留大屋子（地頭代）」とある。⁽²⁸⁾ この大屋子が誰なのか特定できないが、かつて15世紀の大島は辺留との交易に深く関わった、例えば玉之／掟を務めた家筋の者であるだろう。このように、読谷山という地域社会が交易する圏域のひとつとして大島・喜界と繋がっていたと考えられるのであった。

卷十三の次のオモロは交易に活気ある読谷山をよく表わしているだろう。

一聞ゑ読谷山

押し上げ 見あぐで

だりす 走りす ちゃれ

又鳴響む読谷山

又上の船 百御船

又下の船 八十御船 ⁽²⁹⁾

このように捉えてみると、護佐丸と読谷山を謡ったオモロが見出せないことも領ける。卷二には中城移封後の護佐丸を謡ったと思えるオモロ群が描かれている。そのひとつが徳之島・大島を謡うばかりである。

一中城 根国

根国 在つる 隼

徳 大みや

掛けて 引き寄せれ

又鳴響む 国の根

国の根に 在つる 隼 ⁽³⁰⁾

読谷山按司として大島・喜界島の統治を任せられた護佐丸は、中城按司になってもその権益を保持し続けようとしていたことになる。

対する阿摩和利が活動の拠点とした勝連の人たちによる航海を謡ったオモロが、卷十三のなかに奄美の島々を謡うオモロ群とともに配されている。「勝連人が 船遣れ」「勝連が 船遣れ」と謡い出されるそれらは、「徳 大みや」「請 与路」「徳 永良部」などからの「みおやせ」（奉獻）を謡っている。たとえばそのひとつは次のようにある。

一勝連が 船遣れ

船遣れで 御貢

喜界 大みや

直地 成ちへ みおやせ

又ましふりが 船遣れ ⁽³¹⁾

奄美の島々をそれぞれ謡うオモロとともにあり、勝連人が、「直地 成ちへ」（地続きにして）と謡う。これに対し中城のそれは「掛けて 引き寄せれ」（保護し支配して引き寄せよ）と謡った。この地続きにしてと支配して引き寄せようという表現の差異が、そのまま麻摩和利と護佐丸との奄美への繋がりの違いを意味してはいないか。護佐丸は古くからの交易の拠点として機能した読谷山を統治することで交易の権益を確保した。阿

摩和利は統治する勝連から交易を繰り広げ、領地とする勝連を豊かにしたという違いである。巻十六のオモロがそのありようのひとつだ。

一勝連わ 何にぎや 謐ゑる

大和の 鎌倉に 謐ゑる

又肝高わ 何にぎや ⁽³²⁾

勝連が日本の鎌倉に謐えられる。勝れた阿摩和利は誰に謐えようと謡われる程であった。

こうした護佐丸と阿摩和利の立場の違いが、奄美の島々での交易を巡る権益の争いを惹起したと考えられる。護佐丸の中城移封後の大島・喜界島の叛乱も、こうした阿摩和利と護佐丸との関係で理解できる。また1450年の越来王子（尚泰久）の喜界島出兵も、娘婿となる阿摩和利の交易にともなう権益の拡大に対抗する、或いは便乗した地域間交易の支配権の確保ではなかったか。その後、1454年尚泰久が王となって四年後の1458年に護佐丸も阿摩和利も対立のなか共に滅びた。そしてその翌年、尚泰久を支える金丸（尚円）が御物城御鎖之側となつて財政・外交の権限を握る。結果として按司たちを財政的にも支えた地域間交易の権益は、中国との朝貢交易のように王府へと集中していくことになる。その意味で1466年尚徳王自らの喜界島出兵も、王府の権限強化のために、国境を接する琉球北域との地域間レベルの交易まで掌握する狙いがあったからだとも言えるだろう。同年『球陽』には「始任_二泊地頭職_一、而掌_二管泊邑及大島・徳島・鬼界・輿論・永良部等島_一」⁽³³⁾と、泊地頭職が設置されたことを記している。「おくとより上」と呼称された奄美の島々からの年貢などは、その総てを改めて王府が管掌することになったのである。

こうして『おもうさうし』に謡われた「辺留ぬ子」を読み解くことが、琉球の按司たちや王府の島々との交易をめぐる動向と深く関わっていることを管見することになった。

3. 琉球の史書と大島諸家譜が記す大島謀叛と「笠理邑」

尚徳王は自らの出征で1466年喜界島の征討を成し遂げる。その尚徳が1469年に没すると、尚泰久に仕えた金丸が王位に就いて尚円となった。新たな（第二尚氏）王統の始まりであった。その後叔父尚宣威から継いだ3代目の王に尚円の子尚真が就くのが1477年。在位は1526年までの50年に及ぶ。この間、按司の首里集居から神女組織や位階制・職制など国家機構が整えられていく。

『おもうさうし』巻一に、この尚真王と笠利を謡ったオモロが登場するのだった。

一聞得大君ぎや

天の祈り しよわれば

てるかはも 誇て

おぎやか思いに

笠利 討ちちへ みおやせ

又鳴響む精高子が ⁽³⁴⁾

歌意は、聞得大君が天の神に祈り給与えば、太陽の神も喜んで祝福し、尚真王に笠利を討って奉獻しようという笠利討ちを謡うのである。尚真王代は八重山や久米島の征討が記されるばかりで、やはりこの笠利討伐の事は史書にはない。ということは、新たな島討ちに際し既に王府の軍門に降っていた大島・喜界島の島討ちを、最高神女の聞得大君が儀礼的に謡うことで再現し、王の支配の威光を讃め称えたものなのかな。それとも尚徳による征討後も奄美北域の島々は依然として不安定な状況下にあり、他島への波及を恐れて密かに笠利討ちが行われたのだろうか。

国家機構の体制強化は、首里王府を頂点とする島嶼統治の仕組を確かなものにすることでもあった。この尚

真王による笠利討ちがそうした地域支配確立と王権誇示の為に行われた可能性は否定できない。それを裏付けるような『李朝実録』の一文がある⁽³⁵⁾ので、それをここに描いてみよう。

「成宗実録」成宗24（1493）年の条で、尚円王の使者とする梵慶が書契を持参して来聘したという記録である。1470年に尚真が王位を継いでいるから、この書契は尚真王代のこととなる。その書契にはこのように記されている。

窃以、吾陋邦附庸、曰大島。近來、日本甲兵來欲之。由是、戰死者甚多。雖然、每戰勝之者十八九、折一衝於千里。

日本甲兵が大島を奪取しようとして戦いが繰り返されるが、撃退しているという記述である。この「日本甲兵」とは武装した倭人海商を含む倭寇のことではないか。少なからず、大島を挟んで倭人の兵力と琉球軍の戦闘が続いていることを語るものだ。

この梵慶なる使者は、1467年や1472年に朝鮮国に琉球王国の使者と名乗った禪僧の自端西堂のような偽使かもしれない。⁽³⁶⁾つまり十五世紀後半に琉球王国の名をかたって朝鮮通好に有利な立場を確保しようとした倭人海商⁽³⁷⁾ということだ。仮にそうであっても、この記述は奄美北域の当時の状況を知る手掛りとなる。

先のオモロを読み合わせてみれば、そうした「日本甲兵」を笠利に討ち果して、尚真王に大島を奉獻しようという解釈が可能になる。この日本の甲兵は尚徳に討伐された喜界島や七島を含む九州の海人たちと考えられる。書契は戦闘の十に八、九が勝利だとするが、こうした武装集団の進出は、海人たちが東シナ海での活動拠点の確保を不可欠とするなかで、持続的に繰り返されたことを示している。

その尚真から五子の尚清、そしてその二子尚元と代を重ねる過程で、再三琉球王府による大島討伐が行われていくことになる。

尚清王代の1537年、「時發兵討大島酋長與湾大親」（『中山世譜』）⁽³⁸⁾と、史書は記述した。「大島有酋長數人」と、何人かいる大島の酋長の一人を與湾大親と呼んだ。その人為は「性質忠考 惟善是務」であった。同僚酋長による謀叛の讒言によって、尚清の軍が派遣される。「與湾大親、仰天嘆曰、「吾無罪而就死 知我者天乎」、自縊而死」とあるその記述は、先の阿摩和利の讒言で自死した護佐丸と全く同一である。この記述は『球陽』でも同様になされている。だが、『中山世鑑』⁽³⁹⁾の記録は、「嘉靖十四年ノ比ヨリ 北夷大島謀叛ノ由聞得ケル間」と、1535年からの大島の叛乱を記すが、與湾大親とは特定しない。大船五十余艘は「大島名勢ノ津ニソ着セ給、逆徒等、一戰ニモ不レ及、皆頸ヲ延テ、降參ヲソ致シケル」とあって、記述の内容が少し具体的に施されている。

この「名勢ノ津」とは名瀬湊であろう。『元禄國絵図』（1702年作製）で名瀬湊は現在の名瀬市大熊の湾に記されている。その奥の浦上では平家落人と語られる平有盛が対峙する有屋のモリヒラの按司を討ったという伝承がある。またそのモリヒラの居城と伝わる山は、現在その一部が削られてはいるがグスク遺構を有し、人びとはその山に按司屋敷を伝承していた。『おもうさうし』卷十三には「有屋奇せ宣り人 瀬名波捷」とあり、追い風を願って帆走させよと謡う。何時頃のオモロか分らないが、神女や捷を務める人物が出てくる。⁽⁴⁰⁾少なからず『中山世鑑』の記録は土地の伝承とも呼応している。では、與湾大親とは誰か。一説には、遺跡や伝承などから笠利町用安の人物とも、又一説には、文化4（1807）年的小禄親方の祈願文書などを伝える宇検村湯湾の人物とも考えられる。俄にいずれかを與湾大親に同定することは難しい。では、『中山世鑑』の蔡鐸本も「大島謀叛」を記すように『中山世鑑』に記された「名勢ノ津」の「逆徒」とあるのは讒言をした側の同僚の酋長に相当するのか。同時代の史書の記録がない大島からは、遺跡や人びとの伝承が数少ない手掛りとなる。後述する『南島雜話』に、現在の名瀬港に臨む現厳島神社を祀る山を「大和城」と大和を冠して記すこと、『逆徒』の背景を窺わせるものか。少なからず大島討ちが史書に載せられはしたもの、護佐丸同様の死に方

をした與湾大親だけが、後代の息子糖中城とともに名前を記される。この大島討伐の本来の意味が問われねばならない。たとえば『球陽』には、この與湾大親討伐の後に「奥渡より上の扱理」を任用する一文を描くのであった。

次の大島謀叛は琉球の史書には載らない。大島のユカリッチュ（由緒ある家筋の人）の家譜や文書の記録から読み出せるものである。

『屋宮家自家正統系図』⁽⁴¹⁾の始祖「摩文仁親方」に次のように記される。

嘉靖年間、大島東間切諸鈍村之住人伊喜與保比屋 與牟知喜與兄弟二人 共狭_ニ異図 駆_ニ集惡徒
山口構_ニ一城 — 略 — 振_ニ逆威 橫_ニ領_ニ島土貢 — 略 —

イキヨホノヒヤアとヨムチキヨ兄弟が、加計呂麻島の諸鈍で悪徒を集めて城を構え、一島の土貢を横領した。それを王命によって摩文仁親方などが派遣され討滅したとある。そしてこの討滅後にも、このようにある。「其後、大島残徒処々蜂起、叛_ニ國法_ニ」という状況に、再度摩文仁親方は大島に赴き、諸鈍に館を建て十年居り安定したので帰国したと記すのである。少なからず一度の遠征だけでは済まされない残徒たちの蜂起が続いたことが窺える。

『師玉家系図』の「尚朝 金武按司」⁽⁴²⁾ は次のように記す。

大明嘉靖年中大島之臣下焼内縣令有名柄八丸云強賊又東縣諸鈍_ヲ — 略 — 其親屬兄弟等錄乘公恩奢侈甚（於比處）兩賊相則蜂起惡黨多勢奮諸民之財產剩海陸塞通路掠取貢物種々盜業舉而不可計朝貢 — 略 —
ここでは焼内間切（現宇検村）の強賊名柄八丸から書き起こされ、諸鈍の一族とはかり、王府への貢物を掠取して、朝貢をしなかったとある。諸鈍のみならず『おもろさうし』に「中瀬戸内」と記された大島海峡を中心とする大島南域に広がる謀叛であったようだ。

この二家の系図は、王府から派遣された人物をそれぞれ先祖と描くなかで、諸鈍や名柄の叛乱を記した。次の史料は、天明4（1784）年の芝家の『嫡子代々郷土格被仰附次第帳』のなかの「口上覚」に記述された「家之由緒」の一部である。それは芝家の祖となる「嘉留持」を記すなかに出てくる。

右、琉球御支配之砌 — 略 — 西間切大親職、相勤候処、東間切諸鈍村之者共、并ニ屋喜内名柄八丸与申者、惡意を工ミ、妨民家ヲ、年貢相滯候ニ付、右為征罰 — 略 —⁽⁴³⁾

この征罰により「按司一頭ニ成」とある。これらの文書が記す謀叛とは、「土貢横領」「貢物掠取」「年貢相滯」と、どれも王府への年貢を私することで一致する。ではその謀叛人となる者とはどのような存在か。諸鈍の「伊喜與保比屋／イキヨホヒヤア」とあるヒヤアとは、大親・大屋子の訓みの転訛による呼称である。⁽⁴⁴⁾ 氏族の長を意味する大親が、官制のなかに用いられ大屋子とも言う。諸鈍のヒヤアは「其親兄弟」の奢侈を語る文言から、一族或いは氏族共同体の長としての大親と理解できる。まだ王府の官制に組み込まれていない、根生いの豪族の意味合いがあるか。また諸鈍とは加計呂麻島で東西の位置となる実久で、源為朝の子とする三次郎伝承が、ヨホ（權）を三回漕いで琉球に渡る豪傑ウフヨホ（大權）ガナシと語る。イキヨホの「ヨホ」もそれに類する海人の豪族を想わせる。先の「大島有_ニ酋長數人」のうちの一人ともされる存在であったろう。

では、ここに琉球王府の存在を描くと、何が見えてくるのだろう。尚真王期に位階職制が整う。王府を頂点とした地域支配の制度的強化のため辞令書が発給される。奄美で現存する最古の辞令書は嘉靖8（1529）年にある。大島支配が進行する一方で、謀叛を起こす地域が存在した。そしてその地へも辞令書が出されていく。

尚清代嘉靖27（1548）年のものは、この諸鈍を含む東間切のものである。

しよりの御三事

せんとうちにしのまきりの
にしの大やこハ

一人ひかのしよりの大やこに
たまわり申候
しよりよりひかのしよりの大やこか方へまいる
嘉靖二十七年十月廿八日⁽⁴⁵⁾

諸鈍が属する東の首里大屋子に対し西間切の西の大屋子職を補任する内容である。先の芝家の「口上覚」では、西間切大親職から按司一頭になったと記すが、既に首里集居が行われたなかで地方に按司は存在しない。芝實雄（好徳）が薩摩の山川で記した「家之由緒書付」で、「荒増私覺之伝」に「大様荒々」な記述で精確さを欠いたのかもしれない。その意味ではこの辞令書が対応する可能性も考えられる。少なからず、辞令書が発給されているのは、謀叛を治めた後と考えられる。また『屋宮家自家正統系図』では、諸鈍討滅後に残徒たちが各地で蜂起することを記して、摩文仁親方の十年間の新たな諸鈍滞在を記した。この動向も辞令書との関連を考えねばならない。

この残徒討滅の十年間に對応するかのように、尚元が王位についた嘉靖35（1556）年には、謀叛を起した八丸の拠点となった名柄の掟職を決めた辞令書が発給されている。

しよりの御三事
やけうちまきりの
ながらのおきてハ
一人なおんのおきてに
たまわり申候
しよりよりなおんのおきての方へまいる

嘉靖三十五年八月十一日⁽⁴⁶⁾

名柄に保存されている5通のうちの1通である。「たらつ」の居番役から名音掟役へ、そしてこの名柄掟の後に目差の職に就くまでの過程を、一連の辞令書から辿れる。やはりこの名音掟に名柄掟職を、即ち集落管理職の役を任命するのも、八丸討滅後の治安が行き届いた結果のことと考えられる。

琉球の史書に載ることのないこの諸鈍や名柄で起きた謀叛は、討伐後に出来たであろうこれら二種の辞令書の発給年に準じて考えると、1545から1555年の10年間のなかで起きたことと推定できる。更に『屋宮家系図』から、摩文仁親方の子古謝大親が嘉靖31年に首里大親職になったとあることから、その下限を1552年と考えることもできる。しかもこの叛乱の背後には王府への年貢を掠奪し、更には琉球軍に抵抗できるだけの武装した権力集団の存在が想定される。この事を改めて考えてみなければならない。

15世紀、統一王権を確立した尚巴志は琉球王国として明との進貢貿易を進めた。明はこうした公貿易を受け入れる一方で、中国人の海外渡航を禁じた海禁政策をとり私貿易を禁じた。しかし15世紀も半ばを過ぎると、中国人海商たちの密貿易が盛んになってくる。その動向に日本人も関わった、いわゆる嘉靖の大倭寇といわれる「後期倭寇」と海商たちの時代を生み出していった。

先に見た15世紀中頃の漂流朝鮮人を売買した笠利と沖縄読谷山の湾掟との間には、地域間の交易が成立していたことを窺わせた。またその読谷山の按司となって交易を掌握した護佐丸も、勝連人の交易活動を支えた阿摩和利も、ともに按司として奄美地域とその向こうの七島そして大和と繋がる交易活動が、重要な経済基盤として相互に競い合った緊張をともなうものだったと考えられる。こうした地域間の交易をも王府の管掌下に收めようとしたのが、尚泰久であり尚徳であったろう。その後、大島や喜界島が琉球王府の交易活動の傘下に組み込まれても、尚真・尚清王代には再び大島への軍事遠征があった。それも、奄美北域の豪族たちにとっての交易活動が、琉球への年貢掠奪を含めた自在な行動と広がりを持ったからだと考えられる。つまり倭寇的な交

易とでも考える根強い私貿易が保持された状況にあったと言える。

奄美の島々を含む環東シナ海域の東南アジアを含む通交は、15世紀の明・朝鮮・日本・琉球という国家間相互の関係から、16世紀になると海禁下の中国沿岸での出会貿易、即ち密貿易が栄んとなる。従来の通交網は多様な海商たちの活動の場となっていました。こうしたありようを「倭寇的状況」⁽⁴⁷⁾とも呼んでいます。そうしたなかに奄美の島々も位置していたことを確認しておきたい。

先の名柄の辞令書は、嘉靖35（1556）年8月11日の発給であった。そしてその13日後の24日、中国沿岸でひとつ出来事があった。

薩摩の大隅半島の波見に拠点を構えた中国人除海が日本人とともに中国沿岸に入寇し、杭州の乍浦^{さほ}で胡宗憲^{じや}によって殺されたのである。中国の記録に依れば、その前年にも日本人辛五郎と党衆を結び数萬をもって柘林^{りん}・乍浦を掠めたことが記されている。⁽⁴⁸⁾ この除海の叔父除惟学が長崎は五島に拠点を構えることになる王直とともに日本へ来たのが1548年。除惟学は同51年に除海とともに大隅に渡ってきたのである。この除海と行動を共にした辛五郎は大隅島主の弟とされる。少なからず種子島を含む南九州を根拠地とした除海と行動を共にする倭寇の活動が、大島における琉球への貢船略奪の時期とほぼ連動するようになっていたのである。

この除海が中国で敗死し、その敗残の集団であろう倭寇たちが琉球の境界に至ったということで、この年に尚清から王位を継いだ尚元は兵を出して討伐しているのだった。⁽⁴⁹⁾ この境界とは大島北域であったとも考えられる。この敗残の倭寇たちはその後どうしたのであろうか。除海亡き後の波見には、以後近世にかけて南方貿易に活躍する重家が1559年に来ている。⁽⁵⁰⁾ 1567年の明の海禁政策解除、また1588年の秀吉の海賊停止令と続くなか、生き延びた倭寇たちは猶も海人としての活動を続けたに違いない。

先の諸鈍には兄弟謀叛と符合する伝承がある。里のナングモリバラ（ハラ=一族の意）と金久のグリヤバラとの豪族対立の話である。このグリヤ或いはゴリヤとは、倭寇の頭領を甲螺とする名に由来している。金久即ち海岸砂丘に居を構えた外来の集団としてのグリヤバラという意味になる。又、與湾大親の讒言をした同僚の酋長として、古見間切の我利翁という人物が伝説に紹介される。⁽⁵¹⁾ これも同系のガリヤという呼称となる。こうした琉球の大島討伐に関わるような伝承に登場する人物が、倭寇との関連を窺わせるのも興味深い。

更に時代は下って天正年間に七島即ちトカラの中之島で討伐された油津（日南市）の東與助という海賊も、大島南域の瀬戸内町小名瀬に祀られてある「平家の七つ甕」と関連する。その甕のひとつに収められた骨を、ユタが神懸りしてヒウガヨスケのものと教示したと伝わっている。これもまた嘉靖の倭寇以後の海賊を語っていることになる。

このように琉球軍の大島討伐の背景に、王府への年貢掠奪を働く豪族たちの存在があった。しかもその動向は、環東シナ海域の「倭寇的状況」とも連動するかのようにある。改めてここに、前述の『李朝実録』に記録された尚真王の書契の文言「日本甲兵」を措くと、それは一層明らかになってくるだろう。

こうした状況は、大島が琉球王国の版図に押し込まれながら、そこからはみ出すように自在な交易活動を続ける地域として、国家に組しない時に国家に抗する社会としてあったことを窺わせる。こうした動向に対して琉球王府にとって大島は確保すべき北域の国境としての役割を帯びるようになっていたと考えられる。

そして再び、琉球の史書は琉球軍による大規模な大島討伐を記すことになる。史書にはこれが最後の大島討伐として記述される。

1571年尚元王に率いられた船五十余艘の大軍による大島遠征がそれである。

『中山世譜』は次のように記す。

本年、王親統_二大軍_一、往征_二大島_一、先_レ是、大島酋長與湾大親亡後、其同僚等謀叛、絶_レ貢不_レ朝、由_レ是、

王親率_二大軍_一、駕_二船五十餘_一、往征_二大島_一、賊徒領_レ兵迎_レ敵、戦未_二數次_一、大敗而走、官軍深入_二其境_一、——略——⁽⁵²⁾

ここでも征討の原因は「絶_レ貢不_レ朝」と、みかまえ（貢納）をしなくなったことにある。かなり徹底した討伐となったことが窺える。『球陽』もほぼ同様の記述となっているが、その後に馬順徳が王の病気を身代りに没し、長男が按司となった件が続く。そしてこの大島討伐がどの地であったのかを具体的に記す一文が、「久米島赤嶺・宇栄比屋、討_二—征_一大島_—賞、賜_二地數畝_一」という論功の件となって記録されている。

中山、遣_二軍兵_一征_二—討_一大島_—之時、久米島仲里間切儀間村赤嶺・山城村宇栄比屋、従_レ軍而行、惟笠理村人、只恃_二地甚_一嶮岨_—、不_レ敢_二服降_一、大将令_二他_一名征_—討_二其邑_一、赤嶺・宇栄比屋等、奮_レ勇励_レ力、相共攻_—破笠理邑人_—、遂致_二投誠_一、聖主嘉_二其功勞_一、賞賜_二大原地數畝_一⁽⁵³⁾

討伐の地は、「これ笠利村の人、ただ地甚だ検阻なるを特み、敢えて服降せず」と、笠利村を言う。先のオモロから尚真王の笠利討ちを確認したが、遂に今度は尚元王自らの笠利遠征ということになる。

その記述は多くの興味深い事柄を含んだものだ。まず険阻な地勢を言う。笠利が海に臨む位置にありながらのこの記述とは、軍勢が直接海からではなく背後の山から攻めたという意味を含むか。確かに笠利と山を挟んだ位置にある屋仁には、屋仁按司ガナシの戦に滅んだ伝承が語られている。また西海岸側の赤木名には出土物が12・13世紀と14・15世紀にまたがる大規模な中世山城の遺構を持つ赤木名グスクがある。しかも『おもろさうし』には「赤木名ののろ」や「親勢頭部」を謡うオモロが載る。首里王府の女官とされる「親勢頭部」とは、遠征した王に随伴して来島した人物のことなのか。「赤木名の百神」に見送られる様が謡われる。或いは、東海岸の宇宿の海岸は「いくさ浜」とも呼ばれ、琉球軍の上陸地とも考えられている。⁽⁵⁴⁾

そしてなによりも注目される記述は、笠利村を攻めた久米島から従軍した二人の人物、赤嶺と山城の宇栄比屋にある。「比屋」とは前述のヒヤアのことだ。その出身地の「山城」そもそも一人の人名「赤嶺」は、ともに現在の笠利集落の地名となって残っているのである。山城／ヤマグスクは小字名に、赤嶺／ハンニエは昭和22年頃までは地域名として、それ以後は地名となって存するのである。またこの二人が論功として与えられた「大原地數畝」の大原／フウバルは、笠利集落の肥沃な農耕地として広がるウーバル台地のことに対応する。

このように数行の記述のなかに、現在の笠利が表現する地名3箇所に結ぶ言葉が記述されていたことになる。

赤嶺／ハンニエは、現在の居住空間中央に迫り出す台地である。台地は小字名小田／オダ（古称ムエングスク／前城）と上里／ウウザトから成る。この台地はグスク遺跡である。台地下の里に対する上里として居住空間を形成していた。この台地下に、前述のウヤツコロと呼ぶ空間がある。そしてこの台地から山側に少し入って小字山城／ヤマグスクが、用集落との境界となる川アラホの上流に位置する。また農耕地として広がるウーバル台地の段丘面を含む一角には、グスク遺構となるウーバルグスク遺跡が確認されている。

これら個別の詳論は後頁に譲るが、地名三箇所が共にグスクに関連する空間であった。そして地名の由来ともなる背景が、この1571年の琉球王による最後の笠利討ちにあることは間違いないだろう。論功として土地を与えることとは、先の喜界討ちで在地の別の酋長を立てたやり方とは異なっている。明らかに琉球王国の所領として分け与えられることになった。この久米島の赤嶺らがどのような支配をしたのかは分らないが、以後大島での謀叛は起らなかったわけである。つまり年貢などが滞ることなく王府に届けられる実質的な大島支配が成ったということになる。

こうして尚徳王による喜界征討の1466年から100年余の間に、少なくとも尚真王の時も含め五回の大島討ちが行われたことになる。そのうち三回がいずれも年貢の掠取や滞納に端を発したものであった。しかもそこに顕われた順わぬ権力集団は、同時代の東アジアに活躍した倭寇たち海人たちとの繋がりも窺えるのであった。

4. 大島諸家譜にみる「笠利間切首里大屋子」

ここで取り挙げる諸家譜は薩摩支配後に纏められたものだが、その先祖たちは琉球王府に所縁を持つ者たちである。前掲の家譜の如く、大島討伐を語るなかに家祖を語るものがある。その一方で、討伐の地にありながら語らない家譜もある。では、笠利との関わりが深い家筋の記述が語るものとはどのようなものであるのだろうか。

辺留グスクの台地裾にある薩摩奉行所跡は、ウントノチとも呼ばれ、王府に仕えた家筋に結ぶ地でもある。その家譜である『嬉姓喜志統親方系譜』⁽⁵⁵⁾を、まず管見してみよう。

同家の「元祖笠利大屋子」は、「嘉靖之始大島之内笠利間切大屋子職」となって渡渉、屋仁村に在職したという。大体1522～1540年の頃か。因に、大島で確認できる最古の笠利間切宇宿大屋子辞令書が、嘉靖8（1529）年である。先の尚清王による與湾大親討伐が1537年であるから、その前後ともなるか。

二代笠利大屋子は王府の宮仕えを経て、父の帰国の時に喜世大屋子に任命され、嘉靖40（1561）年に笠利間切首里大屋子になる。この年代は既に諸鈍や名柄の謀叛を討滅した後ということになる。そして笠利討ちの10年前ということでもある。

同家は王府派遣の役人の子孫が大島に定住した家筋である。この二代までの字名に「親雲上」とあるのが、三代以降「里主」「里之子」となる。世襲を重ねることで知行が減る、知行遁減の制によるものなのだろうか。また墓所も二代目に琉球から屋仁に移っている。この三代喜世大屋子も王府への宮仕え後、父を継いで笠里間切首里大屋子となるが、辞職後に再び職に就き喜瀬大屋子となっている。その子四代も宮仕え後に喜瀬大屋子に就き、「隆慶の末為笠利間切地頭職」とある。この隆慶の末という時こそ、最後の笠利討ちとなる1571（隆慶5）年以後のことであろう。役職もここだけ地頭職と記述が変わってなされている。

この四代に直子がなく、五代に養子がなって家督を相続し、萬曆23（1595）年笠利間切宇宿大屋子となっている。「無直子」も笠利討ちと関連のある結果かもしれないが、これ以上の記述はない。

そして六代宇宿與人は、代々が就いてきた笠利間切大屋子職の時、薩摩支配（1609）となって宇宿與人に役職が変わり薩摩に仕え、知行20石役米10石を下賜されたとある。

『李朝実録』の「甘隣伊伯也貴」を笠利大屋子と訓んできたが⁽⁵⁶⁾、このことは間切制による統轄が15世紀半にはなされていたことが考えられる。だが、来島との記述からもこの頃は大島常駐ではなかったようだ。むしろ尚真の笠利討ち以後、尚清代の辞令書の発行にともない、大屋子の常駐化が行われるようになったのではないか。多くの家譜が記す役職などの来歴が始まるのも、ほぼこの嘉靖に入ってからの起筆となることもそれに対応している。

少なからず、笠利間切は大屋子の職名から、笠利・喜瀬・宇宿の三分割によって、間切を治める首里大屋子の下に管掌されていたようだ。すると、先の笠利討ちは間切内の一地域の謀叛ということにとどまるものか。王自らの遠征という大規模な軍事行動との関連はどうだろう。隆慶末という記述が、笠利討ち後を窺わせるばかりで、それ以上のことは全く出てこない。

笠利集落には、後に龍郷へ移居し、薩摩支配下での役職と逸早い郷士格の身分を得た家筋がある。その家譜『笠利氏家譜』⁽⁵⁷⁾を、次に辿ってみる。

初代為春は、名瀬間切首里大屋職で渡海するが、年代は未詳とある。この名瀬間切も先の大島討ちのひとつであった。そして同家も琉球から派遣された家筋となる。二代為充は中城王子の宮仕え後に笠利村に帰り、「瀬戸内東間切首里大屋子」を勤める。年代が記されない辞令書が書写されている。それによると「ひかせと」、即ち東勢頭役からの昇進となる。任期中に「御蔵火事」となり、詮議のために琉球に戻って4・5年滞留とある。この御蔵の火事こそが、1545～55年頃の東間切諸鈍の謀叛と関連するか。可能性として充分考えられる。

また為充の妻となるのは、「笠利間切之内辺留村東大屋司女真人見樽」と、辺留にいながら東大屋司（役職が分らないが、大屋子の補佐役か）という役人の娘である。在地の或いは在地化した東間切の役職の家と姻戚で結ぶかたちになる。あのオモロの「辺留ぬ子」の家筋なのだろうか。

そして次の三代為明からの記録は、先の『嬉姓喜志統親方系譜』の四代からの記録とかなり類似した記述となっていることに注目したい。

まず辞令書が書写されている、隆慶元（1567）年に喜瀬大屋子（文中では同2年喜瀬用人司）から笠利間切の首里大屋子を補任される。喜志統四代は「隆慶之末」と5年程の時間差がある。こちらはまた笠利間切の地頭職と役名が異なるが、二代の記述から笠利間切首里大屋子職のことと同じと解せる。つまり両家は相前後しての笠利間切首里大屋子職にあったということになる。しかも1571年の笠利討ちを挟んでことになる。また為明の妻は、「屋喜内間切長柄村大屋職女」とある。父為充の代に起きたであろう謀叛の地となる名柄から娶っている。政略的な意味合いがあるのか。琉球から派遣された役職者同志の姻戚としての結び付きとなるのかは分らない。そしてこの為明も聟養子をとっている。「笠利間切辺留村東大屋司二男」と、母の家筋との深い繋がりを示している。

聟養子となる四代為吉は父を継いで笠利間切首里大屋子職となるが、琉球からの帰島途中に行方不明となる。改めて琉球から嫡子を迎えて五代為転とする。そして萬曆16（1588）年東間切首里大屋子職から笠利間切首里大屋子職に就いている。

喜志統家でも、隆慶の地頭職となった四代に「直子」が無く、養子に家督相続させている。そして萬曆23（1595）年笠利間切宇宿大屋子となっていた。

両家に共通するのが養子を迎えて家を継承するところだ。ともに笠利討伐が行われた隆慶年間を経ての動きとなる。両家が同系の家祖から出ている可能性を窺わせる。喜志統家が終始笠利間切内での役職に就く。笠利氏は東間切の役職など大島南域と関わる家筋と姻戚を結んでいる。それが先の笠利討伐を挟むようにして、隆慶年間に相前後して笠利間切首里大屋子職となり、養子を迎えて後微妙に役職に差が出てくるのだった。

これらの家譜は先の大島討伐には一言も触れていない。また薩摩に差し出す家譜として必要なかったのかもしれない。しかしその役職の任地は、諸鈍であれ笠利であれ、琉球軍討伐後のものとして辿ることができる。奄美統治のありようである。少なからず子供時代を王府勤めで学び、各間切の役職に任せられる。婚姻も在地の有力者の家筋と結ぶ。そうすることで王府の職・位階制を定着させていく。言うなれば、王府派遣の役人たちの在地化が、大島の琉球国化とでも言うべき第二尚王府の同化策ともなったと言える。大島各地の討伐の一方で着実に行われた琉球化としての新たな動きであったと考えられる。

5. 『琉球渡海日々記』の「カサン」

琉球王尚元の笠利討ちから38年後の慶長14（1609）年、薩摩は琉球に侵攻する。その途上の島々として奄美諸島もその軍門に降り、後に道之島と呼ばれていく。

『琉球渡海日々記』とは「高山衆市来孫兵衛尉家元」の「琉球國征伐渡海ニ付往来之日記」である。3月6日の「辰ノ刻」（午前8時）に山川を出港し、翌7日「申ノ刻」（午後4時）に大島に到着した。簡潔な記述で次のようにある。

琉球大島ノ内深江ケ浦ト申所ニ着岸申候 次日八日ニハ打廻リニテ候 カサント申所蔵本ニテ候 人数集リ取構タル由相聞得 諸軍衆兩日ヲ御サシ候得共然トノ人衆モナク御手ニ付候 事無何ノ子細モ候 船元ヨリ八里御座候 ツメ走リニハシリ路次ノ難儀前後始テノ事共ニ候 路次ニ草臥在郷ニ一度泊リ候 —— 略

着岸した「深江ヶ浦」とは龍郷湾のことである。『元禄国絵図』にその位置が記されていることから判明する。七島船頭が著わした『琉球入記』には、大将権山久高勢の船が笠利の津代の湊へ、鹿児島勢の船が西間切に到着したとある。⁽⁵⁹⁾ 難風に吹き流されての着岸となるが、どうだろうか。それぞれ大島の要衝となる湊への着岸となっている。むしろかなり周到な準備の下での上陸だったとも言えそうだ。

翌8日には、「カサント申所蔵本」に「人数集り取構タル」との情報に諸軍衆は迅速に対応している。行程8里を「ツメ走リニハシリ」向かうが、抵抗もなく「御手ニ付候」とある。この「カサン」が「笠利」のことと、「蔵本」つまり琉球王府への年貢などを納める蔵と役所があったことになる。

前述の家譜の記述に、東間切の「御蔵火事」が記されていた。考え合わせれば、間切ごとに王府への貢物を納める「蔵本」が置かれていたことが分かる。笠利間切には笠利、即ち大笠利集落にそれが置かれていたということだ。前述の尚元が軍勢を率いてまで遠征したのも、ここ笠利が大島北域の重要な拠点港の機能を有したからなのだろう。その琉球軍同様に、薩摩軍も山越えで笠利に入ったことを読むことができる。

この「蔵本」の場所とはどこになるか。集落を流れる幾筋もの川がひとつになって海に出る所を、人びとはニヤト／湊と呼ぶ。その河口傍の隆起珊瑚礁の段丘上、前述のウーバルの一隅となる場所が、オグラ／御蔵と呼ばれている。台地上のそのオグラと呼ぶ空間を画するように、1箇所の出入口を持って200メートル程に積み石が、高さ1メートル余の石壁となって続く。蘇鉄がその上に密生しており、一見どこにでも見受けられる耕地の区境いと見逃すが、石壘として築かれたものと判断できる。このオグラが、琉球時代から薩摩時代まで使われた「蔵本」の蔵が立ち並んでいた所だと理解できる。

これらについては、後頁で詳述することにする。

記述によれば、薩摩軍の侵攻に対して、笠利は殆ど抵抗らしいものもなかったことが窺える。あの尚元の笠利討伐から38年後のことである。琉球支配が成ってからのこの時間が、最早それまでの琉球軍に抵抗したあの「日本甲兵」とも結ぶ海人たちの存在を許さなかったからなのか。薩軍の圧倒する武力の前に抵抗する術すらなかったのか。確實に奄美を取り囲く状況は、その構造を変えていたのである。

前述の『笠利氏家譜』で、薩軍侵攻の時に笠利間切首里大屋子であった為転の記述は、どのようなものだろうか。無論、藩政下に成る家譜故に、その記述のままを受け取ることはできないが、参考として措いてみよう。

慶長十三年、従_二日本薩州_一御攻取之刻、両御大将召_二舟一艘_一者、笠利湊_江御着岸、先壹艘者、同間切之内雨天湊_江御着岸、先一番佐文為転_江被_レ向_二御勢_一畢、為転奉_レ属_二薩州御手_一、大島中之御手引、而則島人令_二降_一參——略——⁽⁶⁰⁾

薩軍は笠利湊と雨天／宇天湊への着岸となる。宇天は先の「深江ヶ浦」とは岬ひとつを挟んだ入江であるから領ける。笠利湊となるのは、「先一番」以下を導き語るための記述か。少なからず薩軍の最初の侵攻先ではあったようだ。無論それに続く為転の薩軍への協力振りは、薩摩支配を生き延びる記述ではあったろう。こうしてみると、笠利は琉球軍が討伐を繰り返したように、薩摩にとってもひとつの戦略的拠点と見做されていったようである。

大島北域の笠利は謂はばその地勢的な位置取りから、喜界島・七島そして大和へ、また逆に七島を経て大島から道之島となって琉球へ、南北が相互に漸進する海上の橋頭堡を機能してきたことが理解できる。

6. 嘉永・大島絵図の「辺留村」「笠利村」

『大島代官記』の嘉永4（1851）年に「琉球へ異國人到来ニ付」と書き出される一文がある。「守衛方物頭」の汾陽次郎右衛門一行の大島滞在・銅山試掘の件が記されている。⁽⁶¹⁾ この銅は藩防備のための砲台に必要とされたため、同時に異国船繫場を含む地勢調査の絵図作製が命ぜられていたという。⁽⁶²⁾

確かに1844年・同46年と仏国の軍艦が那覇に入港し、和親・通商を求めていた。46年は仏国の船入港の一週間後には英國商船も来ている。⁽⁶³⁾ 同49年即ち嘉永2年には徳之島亀津沖に異国船四艘が現れ、上陸もしていた。⁽⁶⁴⁾

こうしたなかでの汾陽一行による銅鉱山探しの跋涉と平行した絵図作製であった。代官記は翌嘉永5年の箇所に、「嶋中繪圖書調方名越左源太江被仰付 ——略—— 繪圖書調方ニ付村々原々山海無洩目御見分被成候」とある。汾陽の作製した絵図を元に、更に名越左源太等による精確な絵図が作製されていくことになった。

ここで取り上げる嘉永の大島絵図⁽⁶⁵⁾は所々に切り貼りによる空白があり、急拵えが見てとれる。その汾陽らの一行が作製したとも、或いは名越等の下書きとも考えられる絵図であろう。その絵図に笠利村や辺留村の記載はどのようになされているかを辿ってみる。

まず比較と変容を辿る意味で、その前に元禄15（1702）年の『元禄国絵図』⁽⁶⁶⁾を確認しておく。

現笠利集落の位置に「笠利間切 千貳石」とあるだけだ。他所には書かれている村名が記されないのは、この笠利間切の呼称が村名と同義だったからなのか。東岸となるその位置から山越えして西岸の「笠利間切之内あかきな村」まで横断する山道が描かれている。海沿いの道ばかりが描かれるなかに、幾重にも細かく蛇行した山道の有様は、険阻であっても両所を結ぶ重要な道であったことが窺える。「あかきな村大道より笠利間切大道迄毫里貳拾三町」との記入がある。同絵図はこれ以上の事を記さない。だが、この山道をかつて琉球軍が、そして薩摩の武士達が笠利へと向かったのではと考えてさせるのである。

嘉永の絵図にもこの山道は描き込まれているが、それ以外に記述などない。むしろ海岸線に沿って集落毎の海浜や川、田畠の分布などの記録が細かく書き込まれている。この絵図の目的がそのまま表現される体裁になっている。



嘉永大島絵図